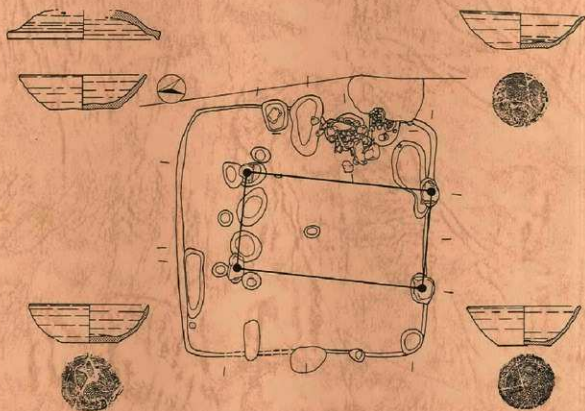


開畝遺跡Ⅳ

—長野県埴科郡坂城町町営住宅建設に係る緊急発掘調査報告書—



2008.3

坂 城 町
坂城町教育委員会

開畝遺跡Ⅳ

2008.3

坂 城 町
坂城町教育委員会

序

坂城町教育委員会教育長 長谷川 臣

今回発掘調査を実施した開畝遺跡Ⅳは、坂城町大字中之条を西に流下する御堂川によって形成された扇状地のほぼ中央に立地しています。御堂川をはさんで南側には豊饒堂遺跡があり、過去の調査で平安時代の製鉄遺構が発見されています。また、今回の調査地点の東約300mには中世における製鉄遺跡「開畝製鉄遺跡」が所在しており、その発掘調査には人間国宝であった故宮入行平刀匠もスコップを手に参加されていたことが昨日のように思い返されます。

今回の発掘調査では、奈良～平安時代の住居址が発見されました。この中には、柱を土中に埋めて立てるものではなく、基礎石を設置してこの上に柱を立てる様式の住居址が発見されました。近隣の市町村には残念ながら発見例はありますが、坂城町内からの発見はこれが初めてとなります。住居様式が平安時代から鎌倉時代にかけて、竪穴式住居から平地式住居へ変化する変遷過程を考える上で非常に注目される発見でした。また、縄文時代の石器を製作していたと思われる痕跡が多数発見されたことから、坂城町が縄文時代から中世を経て現代に至るまでのづくりの町であることを雄弁に語れるようになりました。







開畝遺跡Ⅳの発掘調査は、土中に眠る文化遺産の重要性を理解していただいた関係者の皆様方のご支援とご協力によって行うことができました。厚く御礼申し上げます。また、現地において作業にあられた皆様には、夏の暑い時期と冬の寒い時期の悪条件の中、献身的な努力と、古代文化解明へのゆるぎない情熱によって、調査を無事終了させていただいたことを感謝いたします。さらに、関係機関、関係各位には、文化財保護行政の本旨をご理解くださり、ご協力いただきましたことに心から御礼を申し上げ、序文とさせていただきます。

例 言

- 1 本書は、長野県埴科郡坂城町開竈遺跡Ⅳの発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、坂城町より委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査所在地及び面積
開竈遺跡Ⅳ 長野県埴科郡坂城町大字中之条字開竈2164ほか 1,500㎡
- 4 調査期間 試掘調査 平成14年11月18日～11月22日
現地調査 平成18年6月5日～平成19年3月29日
整理調査 平成19年4月9日～平成20年3月19日
- 5 本書の主な執筆・編集は、助川・田中・時信が行った。
- 6 本書掲載の土器及び石器観察表は田中が作成した。
- 7 本書の作成にあたり、助川・田中・時信のほか、朝倉、天田、坂巻、萩野が主な作業を行った。
- 8 本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。
- 9 本調査及び本書作成にあたって、下記の方々や機関から御配慮を得た。記して感謝の意を表したい。
(敬称略、50音順)

市川桂子、尾見智志、畑更埴地域シルバー人材センター、鈴木徳雄、大工原豊、谷藤保彦、
山口逸弘、山崎まゆみ

凡 例

- 1 遺構の略号は、下記のとおりである。
H→竪穴住居址 F→掘立柱建物址 R→製鉄関連遺構 D→土坑址
Q→特殊遺構 P→ピット M→溝状遺構
- 2 遺構名は、時代別ではなく発掘調査時における命名順である。
- 3 本書に掲載した実測図の縮尺は該当箇所のスケールの上に記した。
- 4 挿図中におけるスクリーントーンは、下記を示す。
遺構 →構築土 →焼土 →カマド
遺物 →須恵器断面・土師器黒色処理 →赤色塗彩範囲 →石器磨滅範囲
- 5 遺物の挿図中での表記は、第1図1は、簡易的に1-1と表記した。
- 6 土層の色調は『新版 標準土色帖』の記載に基づいている。
- 7 出土遺物の観察表の法量は、口径・底径・器高の順に記載し、-は不明、()が残存値、< >が推定値、()・< >がない場合は完存値を示し、単位はcmである。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 発掘調査に至る動機と経緯	1
第 2 節 調査の構成	2
第 3 節 調査日誌	2
第 II 章 遺跡の立地と環境	3
第 1 節 地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	3
第 III 章 調査の概要	7
第 1 節 調査の方法	7
第 2 節 基本層序	8
第 3 節 検出された遺構・遺物	8
第 IV 章 調査の結果	10
第 1 節 竪穴住居址	10
第 2 節 土坑址	15
第 3 節 その他の遺構	34
第 4 節 遺構外出土の遺物	37
掲載土器観察表	39
掲載石器観察表	42
第 V 章 総 括	44
写真図版	46
報告書抄録	49

第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機と経緯

開敷遺跡は、坂城町大字中之条に所在し、標高420～460m前後を測る、御堂川によって形成された扇状地の扇尖部に立地している。平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、弥生～平安時代の集落址とされている。平成5年度に実施された都市計画街路事業に伴う開敷遺跡Ⅱの発掘調査及び、平成11年度に店舗新築に伴う発掘調査によって、古代に位置づけられる集落址が判明している。

今回、この地に町営住宅の建設事業が計画され、遺跡が破壊される恐れが生じた。そのため、原因者である坂城町建設課と遺跡の保護措置について協議を行ったところ、試掘調査を実施して遺跡の状況を確認することとなり、平成14年11月18日から試掘調査を実施した。開発対象地に5本のトレンチを設定して遺構・遺物の確認を行った結果、4本のトレンチで遺構・遺物が検出された。遺構は開発対象地の北側及び西側に集中する傾向が見えたが、これは開発対象地東側においては大規模な削平が行われていたからである。この結果を基に再度協議した結果、住宅建築部分に関しては発掘調査を実施し、駐車場部分は盛土によって遺跡を保護することとなった。



第1図 開敷遺跡Ⅳ位置図 (1:25,000)

第2節 調査の構成

発掘調査体制

- 調査指導者 塩入秀敏（上田女子短期大学教授、日本考古学協会会員）
調査担当者 助川朋広（坂城町教育委員会学芸員）、時信武史（坂城町教育委員会学芸員）
調査補助員 朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、萩野れい子（以上、町臨時職員）
調査協力員 井澤靖、太田武夫、大塚勝司、春日勝、佐藤司、塩野入希幸、千野正彦、塚田義勝、三橋良助、宮澤龍一、柳原喜伸、米田博光、（以上、鉾更埴地域シルバー人材センター）

整理調査体制

- 調査担当者 助川朋広（前出）、時信武史（前出）
調査補助員 朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、田中浩江、萩野れい子（以上、町臨時職員）
調査協力員 荒川園子、三井重子、滝沢かつ子、塚田智子（以上、鉾更埴地域シルバー人材センター）

（事務局）

- 教育長 柳澤哲（～平成19年5月31日）
教育長 長谷川臣（平成19年6月1日～）
生涯学習課長 塚田好一（～平成19年3月31日）
教育文化課長 西沢悦子（平成19年4月1日～）
文化財係長 助川朋広
文化財係 時信武史
朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、田中浩江、千野美樹、中沢あつみ、萩野れい子（以上、町臨時職員）

第3節 調査日誌

試掘調査・発掘調査

- 平成14年11月18日 試掘調査開始。
11月22日 試掘調査終了。
平成18年6月5日 発掘調査開始。D区、重機による表土剥ぎ開始。
平成18年6月6日 D区表土剥ぎ終了。遺構検出、掘り下げ開始。
平成18年6月7日 D区調査終了。B区表土剥ぎ。A区表土剥ぎ開始
平成18年6月9日 A区表土剥ぎ終了。遺構検出、掘り下げ開始。
平成18年8月7日 A区調査終了。航空撮影。
平成19年2月6日 C・D区表土剥ぎ開始。
平成19年2月23日 C・D区表土剥ぎ終了。遺構検出、掘り下げ開始。
平成19年2月26日 C・D区調査終了。

平成19年度中整理作業及び報告書作成。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

坂城町は北信地方と東信地方の接触点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置する。町の地形は、中央部を貫流する千曲川の氾濫によって形成された氾濫原と、千曲川に流れ込む小河川がつくりだした扇状地によって形づくられた小盆地（坂城盆地）に特徴がある。町の北から東にかけては五里ヶ峰・大峰山・虚空蔵山をはじめとする標高1100～1300m前後の山々が連続し、千曲市・上田市との市町村界を形成し、西は大光山、三ツ頭山などの標高1000m前後の山々が連続し、千曲市・上田市との市町村界となっている。南は千曲川右岸の岩鼻と左岸の半過の岩鼻が狭隘な地形を形成し、上田盆地と隔てられている。このような地形から、古来よりこの地域は千曲川流域の要衝の地として注目されてきた。

この地域の気候は、南北に開けた小盆地状をなしていることから、季節風の影響を受けやすいため、夏季は南風、冬季は北風が強い。また、盆地状になっていることから寒暖の差が大きい。降水量は少なく、日本で最も雨量の少ない地域の一つとされている。現在では、この気候も関連し、工業が主要な産業となっており、農業では、りんご・バラ・ぶどうの栽培が盛んである。

第2節 歴史的環境

ここで、坂城町の各時期について代表的な遺跡を挙げながら、町の歴史的環境について概略的にふれておきたい。（括弧内の数字は5、6ページの坂城町遺跡分布図における遺跡番号を示す）

坂城町で最古の遺物は、約14,000～15,000年前の後期旧石器時代の土器片とされる石器である。この石器は南条地区の保地遺跡（3-1）より採集されたものであるが、本出土品以外には込山D遺跡に優先型尖頭器の出土があるが、詳細は不明である。

縄文時代の遺構・遺物では早期押型文系の土器が坂城地区の和平A遺跡や平沢遺跡で採集されている。また、平成12年度に発掘調査が実施された坂城地区の込山C遺跡（30-3）からも押型文系の土器片が少量出土している。この他に縄文時代前期・中期の土器も出土している。後期・晩期では、学史的にも有名な保地遺跡が挙げられる。保地遺跡は昭和40年度と平成11年度に発掘調査が実施されている。前者は縄文時代後期後半から晩期後半までの土器・石器群と、後期後半に属するとされる特殊儀礼的遺構の検出が『考古学雑誌』に報告されている（関 1966）。後者については、縄文時代晩期に位置づけられる再葬墓が検出されており、中でも約19個体分の人骨が埋葬された2号墓址が目される。その他、坂城地区の込山D遺跡（30-4）から昭和初期に採集された遮光器土偶の頭部がある。

弥生時代では、中期以前の調査例がないため状況は不明である。後期後半では、平成5年度に南条地区の塚田遺跡（1-7）で発掘調査が実施され、この時期に属する竪穴住居址36棟をはじめとする遺構が検出され、土器、石器、土製品、及び鉄製品が出土している。

古墳時代では、前期古墳は確認されていないが、中期古墳には中之条地区の仮称東平1号墳・2号墳が挙げられる（注1）。これらは、平成5年度に実施された上信越自動車道建設に伴う発掘調査で、埴輪や土器などの出土品から、1号墳は5世紀第2四半期後半、2号墳は5世紀第2四半期前半に位置づけられた（若林1999）。後期古墳では、町内でいくつかの古墳群の存在が知られているが、中でも代表的なものは村上地区の樞沢古墳群小野沢支群に属する御厨社古墳である。埋葬施設に千曲川水系最大級の横穴式石室を持ち、

全長11.2mを測り、勾玉や切子玉、耳環などが出土している。古墳時代後期の集落址は町内においても多く検出され、特に環状に土器が配列された祭祀遺構が検出された南条地区の青木下遺跡（1・8）が目目される。奈良時代・平安時代の遺跡では、中之条地区の中之条遺跡群（8）とその周辺遺跡に多くの調査例があり、この地域における奈良・平安時代の状況が徐々に解明されつつある。具体的には、寺浦遺跡（8-1）、上町遺跡（8-2）、東町遺跡（8-3）、宮上遺跡（8-5）、北川原遺跡（8-6）、豊饒堂遺跡（20）、開畝遺跡（21）で調査が実施され、古墳時代後期後半～平安時代までの集落址が判明している。また、平安時代の生産遺跡として坂城地区の土井ノ入窯跡（32）があり、瓦の生産が行われていたことが判明し、本遺跡で生産された瓦は、現在の坂城小学校がある場所に8世紀末～9世紀頃に存在していたとされる込山廃寺（54）に用いられたほか、上田市信濃国分寺・国分尼寺、千山市正法廃寺の補修用の差し瓦として使用されていたことが判明している。

平安時代後期、寛治8年（嘉保元）（1094）に村上地区に配流されてきた源盛清が後に村上氏として勢力を持つようになり、戦国時代には村上義清が活躍するようになった。義清の頃、村上氏の居館は現在の坂城地区の満泉寺一帯に所在したとされ、その背後にそびえる葛尾山の山頂には、義清が使用した葛尾城跡がある。このほか、中世の遺跡では坂城地区の観音平経塚（55）をはじめとする経塚と中之条地区の開畝製鉄遺跡（53）がある。観音平経塚は昭和54年と平成4年に調査が行われたが、平成4年の調査では、経塚の年代は14世紀第2四半期とされ、その周辺の五輪塔群の造営時期は14世紀第2四半期から16世紀前半頃に位置づけられている（若林1999）。開畝製鉄遺跡は、昭和52・53年に坂城町教育委員会によって学術調査が実施され、16世紀頃の製鉄炉址2基が確認されている。この調査は県内初の製鉄遺跡の学術調査として学史上に位置づけられるものであった。

江戸時代に入ると、現在の坂城地区を主体とする坂木村、中之条地区を主体とする中之条村には幕府の代官所が置かれ、以後明治維新まで天領として支配された。このことから、この地域を重要視していたことが看取される。代官所は最初、坂木（61）に置かれたが、明和4年（1767）に焼失し、その後、安永8年（1797）には中之条に代官所が置かれるようになった。

以上、近世までの坂城町の歴史を概略した。

注1 周知の御堂川古墳群東平文群1号墳・2号墳とは異なる可能性があるため、仮称とされている。今後、正式な古墳名称の確定が必要である。

参考文献（五十音順・敬称略）

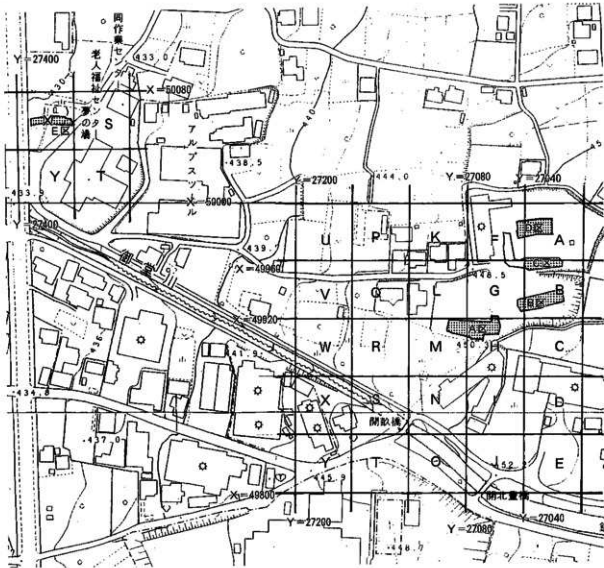
- 坂城町教育委員会 1978『開畝製鉄遺跡―第1次調査報告』 1979『開畝製鉄遺跡―第2次調査報告』 1993『宮上遺跡Ⅱ』 1995『東裏遺跡』 1996『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺倉遺跡・東町遺跡』 1996『寺浦遺跡Ⅱ』 2000『開畝遺跡Ⅲ』 2001『宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』 2002『保地遺跡Ⅱ』
- 関 孝一 1996『長野県埋蔵文化財センター報告』『考古学雑誌』第51巻第3号
- 森嶋 隆ほか 1981『坂城町史』中巻 歴史編（一）
- 柳沢 亮 1998『第5期 開畝遺跡』『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 若林 卓 1999『第9章 東平古墳群』『第11章 観音平経塚』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21』（財）長野県埋蔵文化財センター

第三章 調査の概要

第1節 調査の方法

本遺跡の調査では、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお、将来的に周辺で実施される遺跡の発掘調査での遺構・遺物の調査にも整合できるように、平成14年4月施行の世界測地系2000の座標軸を基にグリッドを組んだ。

グリッドについては、200m×200mの大グリッドを設け区画を行い、その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定(第3図)し、北東端より「A・B・C…Y」区とアルファベットの大文字で命名した。本調査ではA・B・F・G・H・M・X区が発掘調査の対象グリッドである。また、その中グリッドを4m×4mの小グリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で「1・2・3…10」、東西列を東から五十音順で「あ・い・う…こ」と呼称することとした。例えば、その中の北東交点を「Oグリッド」というように命名し、調査に係るグリッドの呼称は例えば「Oあ1グリッド」とし、遺物の取り上げや遺構図の作成の基準とした。また、発掘調査における遺構の実測は、基本的に1/20を基準として簡易通り方実測にて行った。



第3図 開助遺跡IV発掘調査区設定図(1:2500)

第2節 基本層序

本調査区の基本層序は右図に柱状図を示したとおりである。Ⅰ層は表土層である。Ⅱ層は造成土で、かつてこの地に建てられていた工場の造成に伴うものである。Ⅲ層は黒褐色を呈する粘質土層で、遺物を包含する層である。Ⅳ層は黒褐色を呈する粘質土層で、遺物を包含する旧表土層である。Ⅴ層はにぶい黄褐色を呈する砂礫土層で、地山層である。縄文時代に属する土坑などはこの層の堆積と相前後する時期に営まれていたものである。各調査地点において、近代以降の土地利用の形態によって若干の差異はあるものの、概ね上記のような基本層序が確認できた。



第4図 基本層序模式図

第3節 検出された遺構・遺物

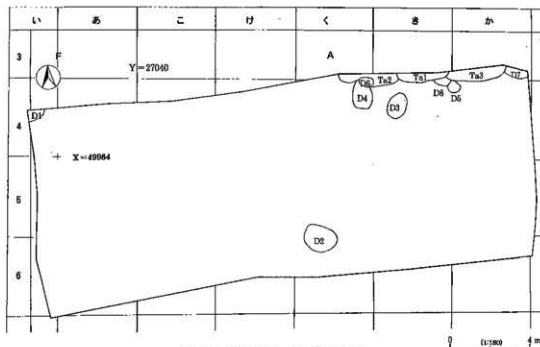
本調査によって検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構)

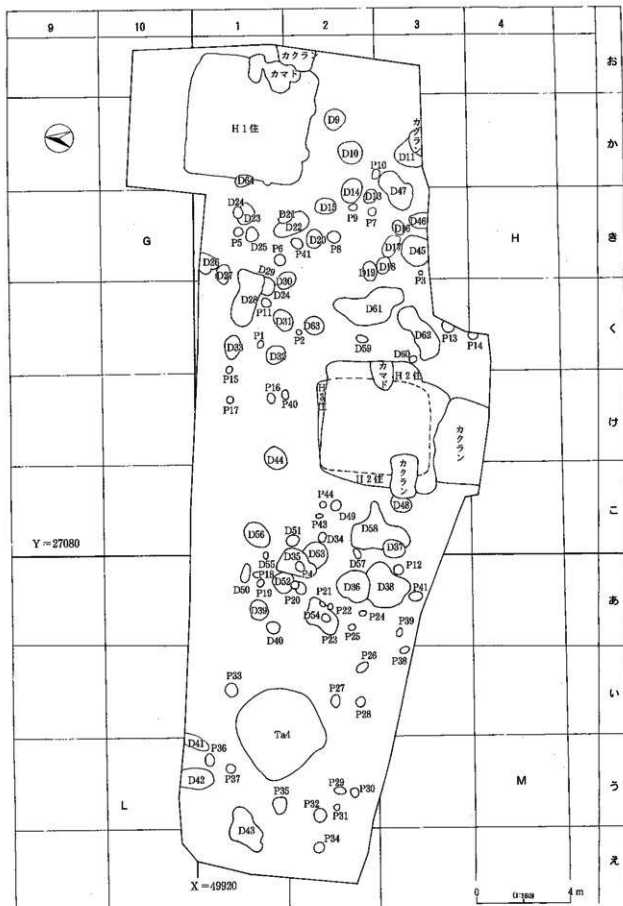
縄文時代	土坑址	33基
弥生時代	竪穴住居址	1棟
奈良・平安時代	竪穴住居址	2棟
	土坑址	4基
時期不明	竪穴状遺構	4基
時期不明	土坑址	27基

遺物)

縄文時代	土器・石器
弥生時代	土器
奈良・平安時代	土師器・須恵器



第5図 開放遺跡Ⅳ D区遺構配置図



第6図 開成道跡IV A区遺構配置図

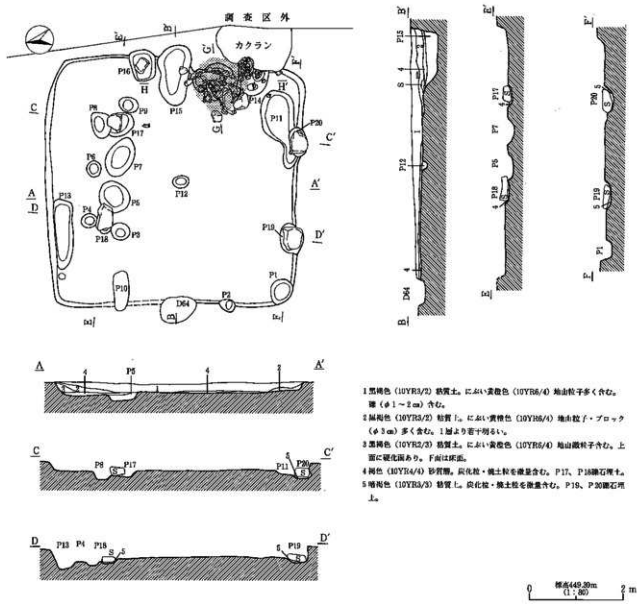
第四章 調査の結果

第1節 竪穴住居址

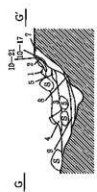
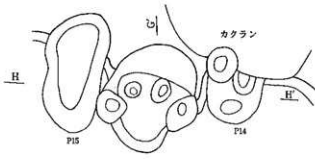
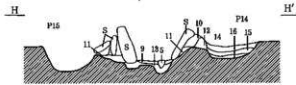
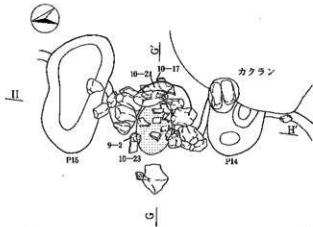
(1) H1号住居址

遺構(第7・8図)

検出位置：Gお10、Gか10、Hお1、Hお2、Hか1、Hか2グリッド。重複関係：D64を切り、攪乱に切られている。平面形態：約5.3m×5.3mの隅丸方形を呈している。主軸方位はE-3°-Sを指す。覆土：暗褐色・黒褐色を基調とする土層が、緩やかなレンズ状堆積を呈していた。床上数cmのところから、屋根の上に置かれていたものと思われる人頭程度の角礫が多く出土した。カマド：東壁において検出された。遺存度は良好で、板状の石材を壁体内面に並べた状況や、須恵器甕の破片をカマド内面に貼り付けている状況が確認できた。また、明確な火床面・灰層が確認できた。床面の状況：概ね平坦であった。硬化した場所は確



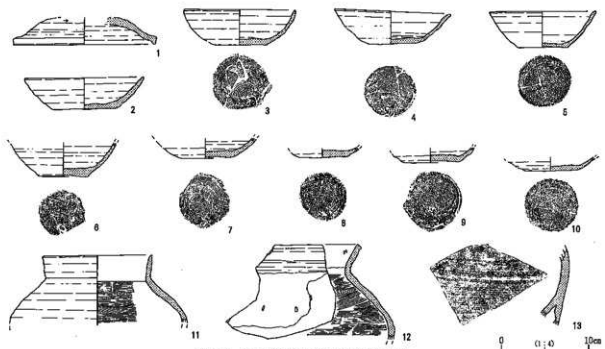
第7図 H1号住居址実測図



- 1暗褐色土ブロック (10YR4/4).
- 2暗褐色 (10YR2/4) 粘土。焼熱による着色化。
- 3褐色 (10YR3/4) 粘土層。
- 4暗褐色 (10YR2/4) 粘質土。褐色 (10YR4/4) 堆山粒子含む。
- 5にじみ黄褐色 (10YR4/3) 粘土。カマド焼築材の底面層。
- 6黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。焼土層粒子含む。
- 7暗褐色 (10YR4/4) 粘質土。カマド張り方層上。焼土粒子含む。
- 8褐色 (10YR4/6) 砂質土。カマド張り方層上。堆山粒子の動きの認められる上。
- 9暗赤褐色 (5YR2/6) 焼土層。火所縁線上。粒子細かく、焼熱により変色。
- 10褐色 (10YR4/4) 粘土。ツグ焼築材。
- 11暗褐色 (7.5YR2/4) 粘質土。ツグ焼築材。
- 12暗褐色 (10YR3/4) 粘土。ツグ焼築材。
- 13黒褐色 (10YR2/2) 粘質土。にじみ黄褐色 (10YR4/3) 含む。付属施設層上。
- 14暗褐色 (7.5YR2/4) カマド張り方層上。
- 15暗褐色 (7.5YR2/4) 粘質土。付属施設層上。
- 16黒褐色 (10YR2/2) 粘質土。付属施設層上。

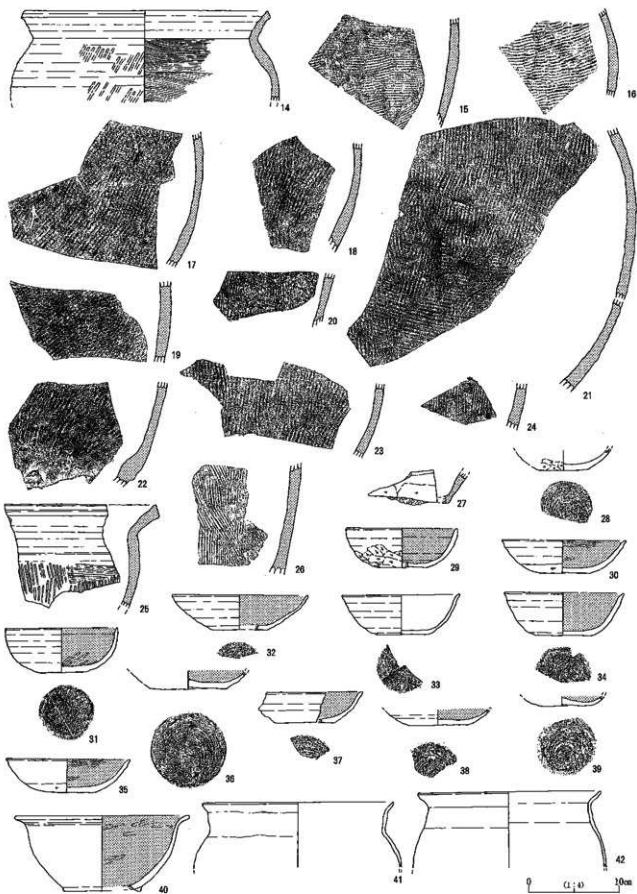
第8図 H1号住居址カマド実測図

標高49.26m
(1:40) 1 m



第9図 H1号住居址出土土器実測図〈1〉

0 10cm
(1:4)



第10图 H1号住居址出土土器实测图(2)



第11図 H1号住居址出土土器実測図(3)

認できなかった。ピット：床面において、複数のピットが確認された。カマドの脇に掘り込まれたピット以外は浅いもので、用途などは判然としない。焼土や炭化物を少量内包したピットも複数見られた。遺物出土状況：住居址の覆土全体からも少量は出土したが、カマド脇のピットからは破片であったがまとまった量の土器片が出土した。住居絶時に一括廃棄したものであろうか。礎石：本住居址では柱穴は確認できなかったが、礎石が4個検出された。床面を掘り込んで設置されていたが、上面は4個とも概ね同レベルであった。配置が南に偏ってはいるが、柱を設置するための礎石として使用されたものと思われる。

遺物(第9・10・11図、第1・2表)

9-1は須恵器坏蓋である。9-2~10は須恵器坏である。9-11~10-26は須恵器甕である。10-39は土師器坏である。10-40は土師器鉢である。10-41~11-45は土師器甕である。時期：出土遺物や住居址の形態から平安時代前半頃の所産と思われる。

(2) H2号住居址

遺構(第12図)

検出位置：Hく2、Hく3、Hけ2、Hけ3、Hく2、Hく3グリッド。重複関係：H3号住居址を切り、南壁一部を攪乱に切られる。平面形態：東西辺の残存状況が不良で推定になるが、長軸約5.5m、短軸約5.3mの隅丸方形を呈している。東辺のカマド周辺は部分的に拡張が行われている。カマドの改修などに伴って行われたのであろうか。主軸方位はE-4°-Sを指す。覆土：暗褐色・黒褐色を基調とする土層が、緩やかなレンズ状堆積を呈していた。床上数cmのところから角礫や炭化材が多く出土した。住居の上屋構造と関係するものであろうか。カマド：東壁において検出された。遺存度は良好で、拳大の角礫を練りこんだ壁体と明確な火床面・灰層が確認できた。床面の状況：概ね平坦であった。出入り口と思しき西側の一部分が硬化していたほかは、全体的に緩い印象であった。ピット：床面において、柱穴をはじめ複数のピットが確認された。柱穴は浅いもので約35cm、深いもので約60cmであった。柱穴以外のピットはどれも浅いもので用途などは判然としなかったが、焼土や炭化物を多く内包したピットも複数見られた。遺物出土状況：覆土全体から土器片などの出土が見られたが、床上数cmのところからの出土量が最も多かった。本住居址は遺物や炭化材の出土状況から、廃絶後に什器や主要建築材を持ち出した後に火を受け、その後埋没していったものと思われる。

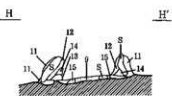
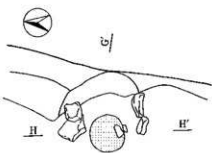
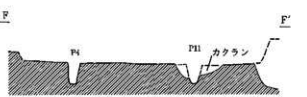
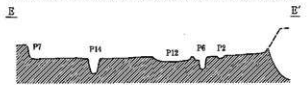
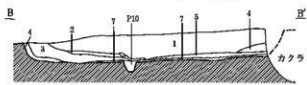
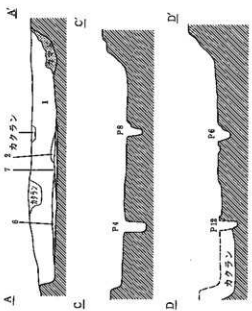
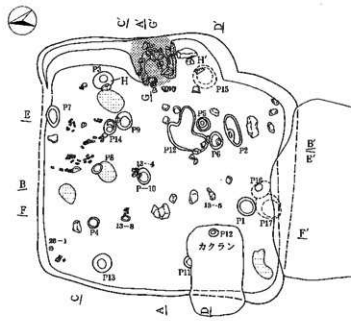
遺物(第13図、第2表)

1~5は須恵器坏である。6・7は土師器坏である。8~11は土師器甕である。時期：出土遺物や住居址の形態から平安時代前半頃の所産と思われる。

(3) H3号住居址

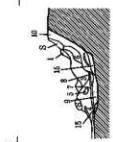
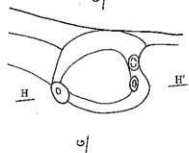
遺構(第14図)

検出位置：Hけ2、Hけ3、Hこ2、Hこ3グリッド。重複関係：H2号住居址に切られる。平面形態：北辺以外はH2号住居址に切られて不明。主軸方位はN-7°-Eを指す。覆土：暗褐色を基調とする土層が



- 1 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土。有機質上。厚 (φ2~5cm) 少量含む。におい黄褐色 (10YR6/4) 地山腐植子含む。
- 2 黒褐色 (7.5YR2/4) 粘質土。におい赤褐色 (5YR4/4) 地山腐植子含む。
- 3 暗褐色 (10YR2/3) 粘質土。におい黄褐色 (10YR6/4) 地山腐植子含む。
- 4 暗褐色 (10YR2/2) 粘質土。におい黄褐色 (10YR6/4) 地山腐植子多く含む。暗褐色上。
- 5 暗褐色 (10YR2/2) 粘質土。黒味? しまり強。地山腐植子含む。
- 6 暗褐色 (7.5YR2/4) 粘質土。厚 (φ1cm)。におい黄褐色 (10YR6/4) 地山腐植子含む。
- 7 暗褐色 (10YR4/4) 粘質土。におい黄褐色 (10YR6/4) 地山腐植子多く含む。黒り方強。

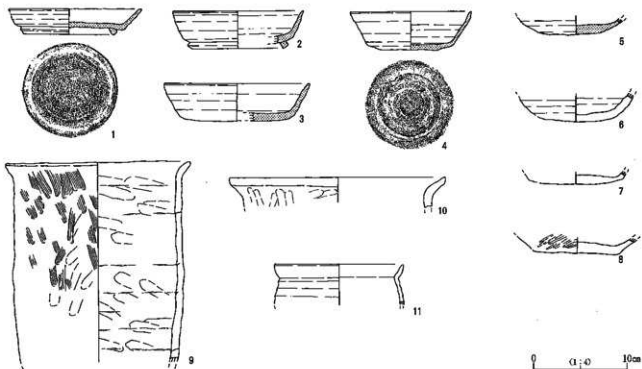
標高449.20m (1:80) 2m



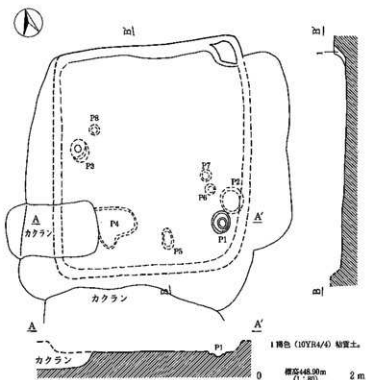
- 1 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土。におい黄褐色 (10YR6/4) 地山腐植子多く含む。
- 2 におい黄褐色 (10YR6/4) 砂質ブロック。におい黄褐色 (10YR6/4) 地山腐植子ブロック状に含む。
- 3 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土。におい黄褐色 (10YR6/4) 地山腐植子。におい赤褐色 (5YR4/4) 腐土腐植子含む。
- 4 暗褐色 (10YR2/2) 粘質土。におい黄褐色 (10YR6/4) 地山腐植子。におい赤褐色 (5YR4/4) 腐土腐植子含む。
- 5 におい赤褐色 (5YR4/4) 粘土ブロック。
- 6 におい黄褐色 (10YR6/4) 粘質土。におい黄褐色 (10YR6/4) 地山腐植子多く含む。
- 7 暗褐色 (10YR4/4) 礫化泥。天井あるいはソダの粘土が同層だったか?
- 8 暗褐色 (10YR2/2) 粘質土。粘子細かい。
- 9 暗赤褐色 (5YR3/3) 火産礫層土。
- 10 暗褐色 (7.5YR2/4) 粘質土。地山腐植子含む。暗褐色 (7.5YR2/4) 粘土粒子含む。
- 11 暗褐色 (10YR4/0) 粘土。地山腐植子多く含む。ソダ腐植材。
- 12 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘土。縦断により黄色。ソダ腐植材。
- 13 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土。ソダ腐植材。
- 14 暗褐色 (7.5YR2/2) 粘土。ソダ腐植材。
- 15 暗褐色 (10YR4/4) カマド周り方強土。

標高449.20m (1:80) 2m

第12図 H2号住居址・カマド実測図



第13図 H2号住居址出土土器実測図



第14図 H3号住居址実測図

堆積していた。埴址：検出されなかった。床面の状況：僅かな範囲でしか検出できなかったため詳細は不明である。ピット：本住居址に伴うと思われるピットは1箇所検出された。壁溝：検出されなかった。遺物出土状況：覆土から弥生土器片が数十点出土した。

遺物（第15図、第2・3表）

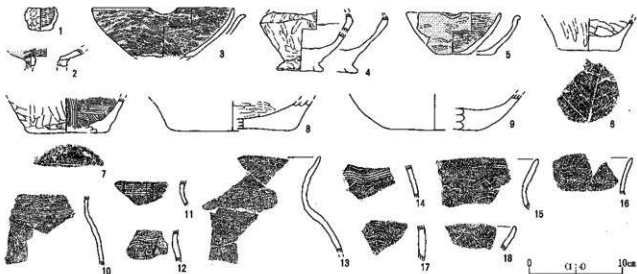
1は手捏土器である。2は高坏である。3～5は鉢で注口を有する。3は丁寧なミガキの後に赤彩されている。6・8は壺である。7・9～18は甕である。時期：出土遺物から弥生時代後期の所産と考えられる。

第2節 土坑址

(1) D1号土坑

遺構（第16図）

検出位置：Fい4グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：緩やかな逆台形を呈し、掘り込み面からの深さは約1.1mである。覆土：下層付近は黄褐色砂礫土と暗褐色粘質土を用いて互層に突き詰め、中層以上は黒褐色の砂礫土で埋戻している。柱の痕跡は残存していなかったが、柱抜き取り痕と思しき土層の乱れが確認できた。遺物出土状況：覆土上層から須恵器・



第15図 H3号住居址出土土器実測図

土師器が数点、下層から縄文土器片が1点出土した。

遺物（第20図、第3表）

1は須恵器杯の底部である。時期：出土した遺物から古代の所産と考えられる。

(2) D2号土坑

遺構（第16図）

検出位置：Aく5、Aく6グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.7m、短軸約1.3mの楕円形を呈し、主軸方位はN-69°-Wを指す。断面形態：わずかに逆台形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：暗褐色（10YR3/4）の砂礫層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：遺物は全く出土しなかったが、覆土の色調などから、弥生期以降の所産と考えられる。

(3) D3号土坑

遺構（第16図）

検出位置：Aき4グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.3m、短軸約1.0mの楕円形を呈し、主軸方位はN-23°-Eを指す。断面形態：わずかに逆台形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：暗褐色（10YR3/3）の砂礫層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：船岡時期は不明である。

(4) D4号土坑

遺構（第16図）

検出位置：Aく3、Aく4グリッド。重複関係：Ta2・D6に切られる。平面形態：長軸約1.5m、短軸約1.1mの隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-10°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約15cmを測る。覆土：暗褐色（10YR3/4）の砂礫層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の状況から、縄文期以降の所産と考えられる。

(5) D5号土坑

遺構(第16図)

検出位置：Aか3、Aか4、Aき3、Aき4グリッド。重複関係：Ta3・D8に切られる。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/4)の、やや粘性のある砂礫層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(6) D6号土坑

遺構(第16図)

検出位置：Aく3、Aく4グリッド。重複関係：D4を切っている。Ta2との切りあい関係は確認できなかった。平面形態：長軸約0.7m、短軸約0.5mの楕円形を呈し、主軸方位はN-0°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/4)の、やや粘性のある砂礫層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(7) D7号土坑

遺構(第16図)

検出位置：Aか3グリッド。重複関係：Ta3に切られる。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：逆台形を呈し、掘り込み面からの深さは約50cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/3)の、粘性のある砂礫層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(8) D8号土坑

遺構(第16図)

検出位置：Aき3、Aき4グリッド。重複関係：Ta1に切られ、Ta3を切っている。平面形態：長軸約0.75m、短軸約0.5mの楕円形を呈し、主軸方位はN-78°-Wを指す。断面形態：すり鉢状を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/3)の、砂礫層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(9) D9号土坑

遺構(第16図)

検出位置：Hお2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.9m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、主軸方位はN-31°-Wを指す。断面形態：概ね箱形を呈するが底部付近で一部オーバーハングしている。検出面からの深さは約60cmを測る。覆土：にぶい黄褐色を基調とする砂質土層に被覆され、最下層には暗褐色の粘質土が薄く堆積していた。遺物出土状況：覆土中から13片の縄文土器が出土した。

遺物(第20図、第3表)

2は深鉢である。半裁竹管による沈線や円形刺突紋が施されている。時期：出土した土器片や覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる

(10) D10号土坑

遺構 (第16図)

検出位置：Hお2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.1m、短軸約0.9mの楕円形を呈し、主軸方位はN-2°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約5cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/3)の、砂礫を含む粘質土層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から弥生時代以降の所産と考えられる。

(11) D11号土坑

遺構 (第16図)

検出位置：Hか3グリッド。重複関係：攪乱によって切られる。調査区外未検出のため不明。平面形態：攪乱および調査区外未検出のため不明。断面形態：緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは約15cmを測る。覆土：褐色(10YR3/4)の、粘質土層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(13) D13号土坑

遺構 (第16図)

検出位置：Hき2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.6m、短軸約0.5mの楕円形を呈し、主軸方位はN-63°-Wを指す。断面形態：概ね箱形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：暗褐色を基調とする土層に被覆されていた。遺物出土状況：覆土中より3片の縄文土器が出土した。時期：出土遺物や覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(14) D14号土坑

遺構 (第16図)

検出位置：Hか2、Hき2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.1m、短軸約0.9mの楕円形を呈し、主軸方位はN-63°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：暗褐色を基調とする土層に被覆されていた。遺物出土状況：覆土中より4片の縄文土器が出土した。

遺物 (第26図、第5表)

7は黒曜石製の石鏃である。時期：出土遺物や覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

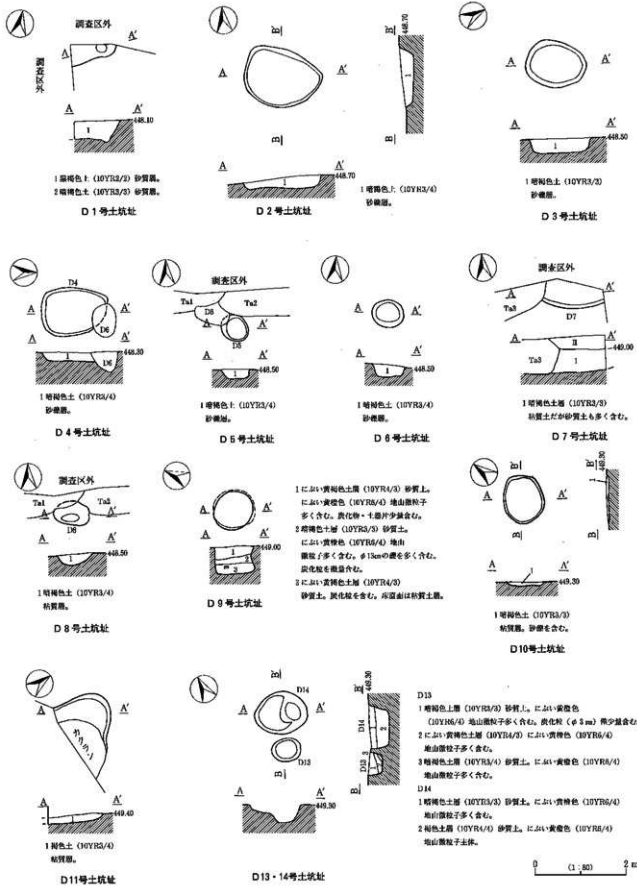
(15) D15号土坑

遺構 (第17図)

検出位置：Hき2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.0m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、主軸方位はN-4°-Wを指す。断面形態：わずかに逆台形を呈し、検出面からの深さは約35cmを測る。覆土：暗褐色、にぶい黄褐色を基調とする砂質土に被覆されていた。遺物出土状況：覆土中より5片の縄文土器が出土した。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(16) D16号土坑

遺構 (第17図)



第16図 土坑址実測図 (1)

検出位置：Hき3グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.6m、短軸約0.5mの楕円形を呈し、主軸方位はN-51°-Eを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約10cmを測る。覆土：黒褐色（10YR2/2）の、焼土粒を含む粘質土層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から古代以降の所産と考えられる。

(17) D17号土坑

遺構（第17図）

検出位置：Hき3グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.0m、短軸約0.6mの隅丸方形を呈し、主軸方位はN-64°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約10cmを測る。覆土：黒褐色（10YR2/2）の、焼土粒・炭化粒を含む粘質土層の単層であった。遺物出土状況：覆土中より2片の弥生土器が出土した。時期：出土遺物や覆土の色調から弥生時代以降の所産と考えられる。

(18) D18号土坑

遺構（第17図）

検出位置：Hき3グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.7m、短軸約0.6mの楕円形を呈し、主軸方位はN-73°-Wを指す。断面形態：すり鉢状を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：黒褐色（10YR2/2）の、砂礫層の単層であった。遺物出土状況：覆土中より2片の土器器が出土した。時期：覆土の色調から古代以降の所産と考えられる。

(19) D19号土坑

遺構（第17図）

検出位置：Hき2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.8m、短軸約0.6mの楕円形を呈し、主軸方位はN-0°-Wを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約10cmを測る。覆土：黒褐色（10YR2/2）の、粘質土層の単層であった。遺物出土状況：覆土中より3片の土器器が出土した。時期：出土遺物や覆土の色調から古代以降の所産と考えられる。

(20) D20号土坑

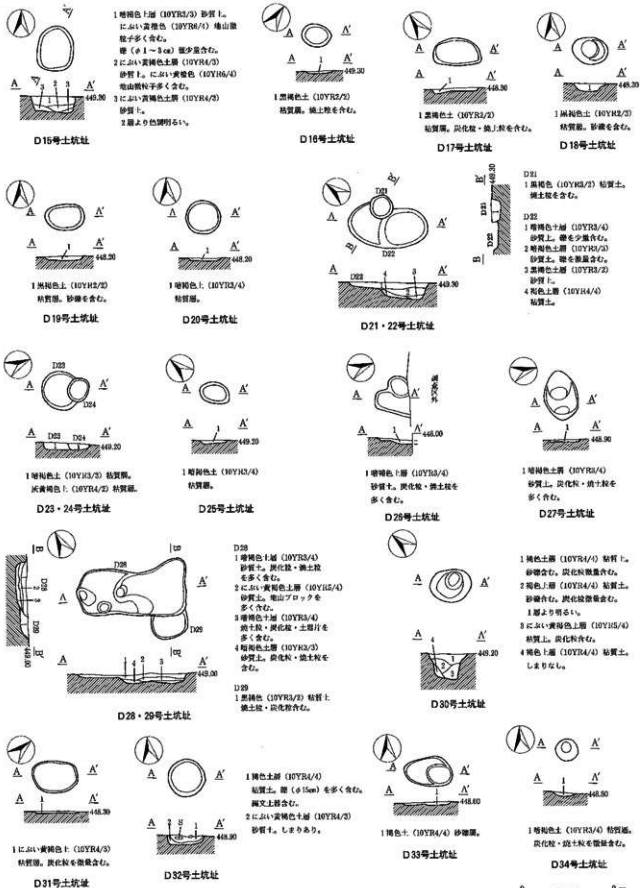
遺構（第17図）

検出位置：Hき2グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約0.7mの概ね円形を呈し、主軸方位はN-87°-Wを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約10cmを測る。覆土：暗褐色（10YR3/4）の、粘質土層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(21) D21号土坑

遺構（第17図）

検出位置：Hき1、Hき2グリッド。重複関係：D22を切る。平面形態：径約0.5mの概ね円形を呈し、主軸方位はN-77°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：黒褐色（10YR2/3）の、粘質土層の単層であった。遺物出土状況：覆土中より1片の弥生土器が出土した。時期：



第17図 土坑址実測図 (<2>)

出土遺物や覆土の色調から弥生時代以降の所産と考えられる。

(22) D22号土坑

遺構 (第17図)

検出位置：Hき1、Hき2グリッド。重複関係：D21に切られる。平面形態：長軸約1.7m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、主軸方位はN-27°-Wを指す。断面形態：2段に掘り込まれた逆台形を呈し、検出面からの深さは約35cmを測る。覆土：暗褐色を基調とする砂質土に被覆されていた。遺物出土状況：覆土中より1点の石鏃が出土した。

遺物 (第26図、第5表)

10は黒曜石製の石鏃である。一部欠損している。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(23) D23号土坑

遺構 (第17図)

検出位置：Hき1グリッド。重複関係：D24に切られる。平面形態：長軸約0.95m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、主軸方位はN-49°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約15cmを測る。覆土：暗褐色(7.5YR3/3)の、粘質土層の単層であった。遺物出土状況：覆土中より3片の縄文土器が出土した。時期：出土遺物や覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(24) D24号土坑

遺構 (第17図)

検出位置：Hき1グリッド。重複関係：D23を切る。平面形態：径約0.5mの概ね円形を呈し、主軸方位はN-28°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約15cmを測る。覆土：灰黄褐色(10YR4/2)の、粘質土層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から古代以降の所産と考えられる。

(25) D25号土坑

遺構 (第17図)

検出位置：Hき1グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.65m、短軸約0.45mの楕円形を呈し、主軸方位はN-30°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約5cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/4)の、砂礫層の単層であった。遺物出土状況：覆土中より2片の縄文土器が出土した。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(26) D26号土坑

遺構 (第17図)

検出位置：Hき1グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：2段に掘り込まれた逆台形を呈し、検出面からの深さは約5cmを測る。覆土：炭化粒、焼土粒を多く含む暗褐色を基調とする粘質土に被覆されていた。遺物出土状況：覆土中より土師器1点が出土した。

遺物 (第20図、第3表)

3は土師器甕である。時期：古代の所産と考えられる。性格は屋外における調理場など火を扱う施設と考

えられる。

(27) D27号土坑

遺構(第17図)

検出位置：Hき1、Hく1グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.0m、短軸約0.7mの楕円形を呈し、主軸方位はN-84°-Wを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約5cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/4)の、焼土粒・炭化粒を多く含む粘質土層の単層であった。遺物出土状況：覆土中より土師器5点、須恵器2点、弥生土器1点が出土した。

遺物(第20図、第3表)

4は須恵器環である。5は土師器環である。時期：古代の所産と考えられる。性格は屋外における調理場など火を扱う施設と考えられる。

(28) D28号土坑

遺構(第17図)

検出位置：Hき1、Hく1グリッド。重複関係：D29を切る。平面形態：長軸約2.4m、短軸約1.2mの隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-73°-Wを指す。断面形態：2段に掘り込まれた逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。床面には3箇所の小ピットが掘り込まれている。覆土：暗褐色を基調とする、炭化粒、焼土粒を多く含む土層に被覆されていた。遺物出土状況：覆土中より数十点の土師器、1片の須恵器が出土した。

遺物(第20図、第3表)

6は須恵器環蓋である。7は土師器甕である。時期：古代の所産と考えられる。性格は屋外における調理場など火を扱う施設と考えられる。

(29) D29号土坑

遺構(第17図)

検出位置：Hき1、Hく1グリッド。重複関係：D28に切られる。平面形態：D28に切られて不明。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約15cmを測る。覆土：にぶい黄褐色(10YR4/3)の粘質土で単層であった。遺物出土状況：覆土中より1片の縄文土器が出土した。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(30) D30号土坑

遺構(第17図)

検出位置：Hき1、Hき2、Hく1、Hく2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.9m、短軸約0.65mの楕円形を呈し、主軸方位はN-33°-Wを指す。断面形態：3段に掘り込まれた逆台形を呈し、検出面からの深さは約0.5mを測る。覆土：褐色を基調とする土層に被覆されていた。遺物出土状況：覆土中より4点の縄文土器が出土した。時期：縄文時代の所産と考えられる。

(31) D31号土坑

遺構(第17図)

検出位置：Hく1、Hく2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.95m、短軸約0.7mの楕円形を呈し、主軸方位はN-49°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは3cmを測る。覆土：にぶい黄褐色（10YR4/3）の、炭化粒を微量含む粘質層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：縄文時代の所産と考えられる。

(32) D32号土坑

遺構（第17図）

検出位置：Hく1グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約0.8mの概ね円形を呈し、主軸方位はN-88°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：黄褐色を基調とする土層に被覆されていた。遺物出土状況：覆土中より縄文土器、礫石器が出土した。

遺物（第24図、第4表）

1は磨石である。2は敲石である。時期：縄文時代の所産と考えられる。

(33) D33号土坑

遺構（第17図）

検出位置：Hく1グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.0m、短軸約0.65mの楕円形を呈し、主軸方位はN-87°-Wを指す。断面形態：2段に掘り込まれた逆台形を呈し、検出面からの深さは4cmを測る。覆土：褐色（10YR4/4）の、砂礫を含む層で単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代以降の所産と考えられる。

(34) D34号土坑

遺構（第17図）

検出位置：Hこ2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.5m、短軸約0.45mの僅かな楕円形を呈し、主軸方位はN-5°-Wを指す。断面形態：椀状を呈し、検出面からの深さは約10cmを測る。覆土：暗褐色（10YR3/4）の、炭化粒・焼土粒を微量含む粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から古代以降の所産と考えられる。

(35) D35号土坑

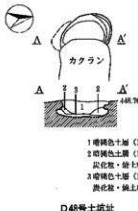
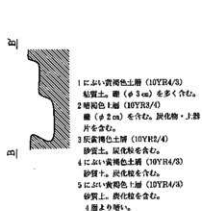
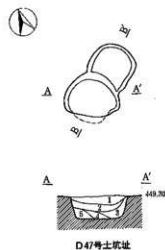
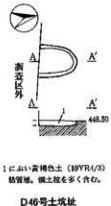
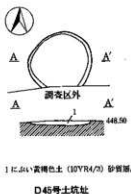
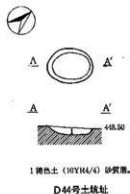
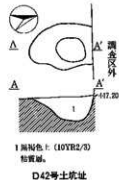
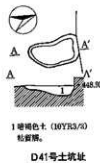
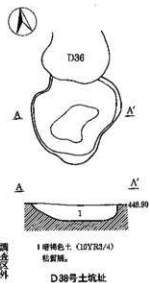
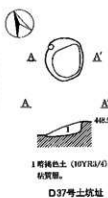
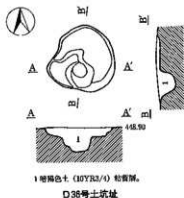
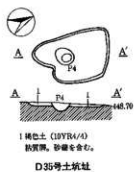
遺構（第18図）

検出位置：Hこ1、Hこ2、Mあ1、Mあ2グリッド。重複関係：P4に切られる。平面形態：長軸約1.7m、短軸約1.1mの僅かな楕円形を呈し、主軸方位はN-29°-Eを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは4cmを測る。覆土：褐色（10YR4/4）の、砂礫を含む粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代以降の所産と考えられる。

(36) D36号土坑

遺構（第18図）

検出位置：Mあ2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.4m、短軸約1.3mの楕円形を呈し、主軸方位はN-9°-Eを指す。断面形態：2段に掘り込まれた逆台形を呈し、検出面からの深さは40cmを測る。



0 (1:50) 2m

第18図 土坑址実測図 (3)

覆土：暗褐色（10YR3/4）の粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(37) D37号土坑

遺構（第18図）

検出位置：Hこ3、Mあ3グリッド。重複関係：D58を切る。平面形態：長軸約0.9m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、主軸方位はN-10°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：黒褐色（10YR2/3）の、粘質土層の単層であった。遺物出土状況：覆土中より須恵器1点、礫石器が出土した。

遺物（第20・24図、第3・4表）

20-8は須恵器環である。24-5は礫石器で、顕著な磨滅痕と敲打痕を残す。時期：出土遺物などから古代以降の所産と考えられる。

(38) D38号土坑

遺構（第18図）

検出位置：Mあ2、Mあ3グリッド。重複関係：D36に切られる。平面形態：長軸約2.2m、短軸約1.8mの不定形を呈し、主軸方位はN-12°-Eを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：黒褐色（10YR2/3）の、粘質土層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(39) D39号土坑

遺構（第18図）

検出位置：Mあ1グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.9m、短軸約0.8mの僅かな楕円形を呈し、主軸方位はN-0°-Wを指す。断面形態：W字状を呈し、検出面からの深さは約25cmを測る。覆土：黒褐色（10YR2/2）の粘質土の単層であった。遺物出土状況：覆土中より7片の弥生土器が出土した。時期：出土遺物や覆土の色調から弥生時代以降の所産と考えられる。

(40) D40号土坑

遺構（第18図）

検出位置：Mあ1グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約0.5mの概ね円形を呈し、主軸方位はN-19°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：黒褐色（10YR2/3）の粘質土の単層であった。遺物出土状況：覆土中より1片の時期不明の土器が出土した。時期：覆土の色調から古代以降の所産と考えられる。

(41) D41号土坑

遺構（第18図）

検出位置：Lい10、Lう10、Mい1、Mう1グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：暗褐色

(10YR3/3) の、粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代以降の所産と考えられる。

(42) D42号土坑

遺構 (第18図)

検出位置：Lう10、Mう1グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：すり鉢状を呈し、検出面からの深さは約50cmを測る。覆土：黒褐色 (10YR2/3) の粘質土の単層であった。遺物出土状況：覆土中より5片の縄文土器が出土した。時期：出土遺物や覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(43) D43号土坑

遺構 (第18図)

検出位置：Mう1、Mえ1グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約2.2m、短軸約1.2mの不正形を呈し、主軸方位はN-68°-Eを指す。底面に径約0.5m内外の小ピットを三箇所伴う。断面形態：各々の小ピットの断面形はU字状を呈し、深いところで検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：暗褐色 (10YR3/3) の礫を含む粘質土の単層であった。遺物出土状況：覆土中より1片の弥生土器が出土した。時期：覆土の色調から弥生時代以降の所産と考えられる。

(44) D44号土坑

遺構 (第18図)

検出位置：Hけ1、Hこ1グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.95m、短軸約0.75mの楕円形を呈し、主軸方位はN-26°-Eを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：褐色 (10YR4/4) の砂質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(45) D45号土坑

遺構 (第18図)

検出位置：Hき3グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.4m、短軸約1.3mの楕円形を呈し、主軸方位はN-33°-Eを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約10cmを測る。覆土：にぶい黄褐色 (10YR4/3) の砂質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(46) D46号土坑

遺構 (第18図)

検出位置：Hき3グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：にぶい黄褐色 (10YR4/3) の粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(47) D47号土坑

遺構 (第18図)

検出位置：Hか3、Hき3グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.65m、短軸約1.1mの連結土坑状を呈し、主軸方位はN-40°-Eを指す。断面形態：2段に掘り込まれた箱型を呈しているが、南西端はオーバーハングしている。検出面からの深さは約50cmを測る。覆土：にぶい黄褐色を基調とした土層によって被覆されていた。遺物出土状況：覆土中より数十点の縄文土器、礫石器、剥片石器が出土した。

遺物 (第20・24・26図、第3・4・5表)

20-9は深鉢である。沈線文や三角刺突紋が施されている。24-3は石斧あるいは石匙である。4は石匙である。6は磨石または敲石で、顕著な磨滅痕と敲打痕を残している。26-3・6は黒曜石製の石鏃である。3は一部欠損している。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(48) D48号土坑

遺構 (第18図)

検出位置：Hこ3グリッド。重複関係：攪乱によって切られる。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：袋状を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：暗褐色を基調とする土層によって被覆されていた。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(49) D49号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Hこ2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.8m、短軸約0.65mの楕円形を呈し、主軸方位はN-14°-Wを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約15cmを測る。覆土：暗褐色(10YR4/3)の粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(50) D50号土坑

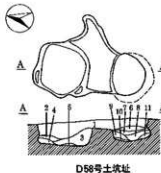
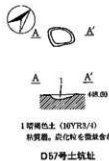
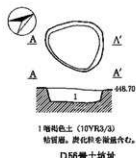
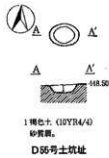
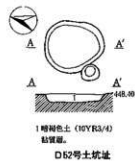
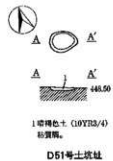
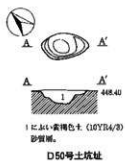
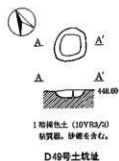
遺構 (第19図)

検出位置：Mあ1グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.0m、短軸約0.5mの楕円形を呈し、主軸方位はN-39°-Wを指す。断面形態：2段に掘り込まれたすり鉢状を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：にぶい黄褐色(10YR4/3)の砂質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

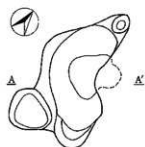
(51) D51号土坑

遺構 (第19図)

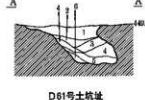
検出位置：Hこ2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.6m、短軸約0.45mの楕円形を呈し、主軸方位はN-58°-Wを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約10cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/4)の粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。



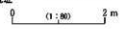
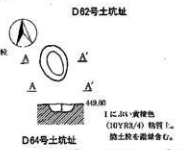
1 におい黄褐色土 (10YR4/3) 砂質土。炭化粒、焼土粒を微量含む。
 2 灰褐色土 (10YR4/2) 粘質土。炭化粒、焼土粒、土器片を含む。
 3 暗褐色土 (10YR3/2) 粘質土。炭化粒、焼土粒、土器片を含む。
 4 暗褐色土 (10YR3/2) 粘質土。炭化粒、焼土粒を含む。
 5 におい黄褐色土 (10YR4/3) 砂質土。地山粒。
 6 におい黄褐色土 (10YR4/3) 砂質土。焼土粒を微量含む。
 7 褐色土 (10YR4/4) 砂質土。炭化粒、焼土粒を微量含む。
 8 におい黄褐色土 (10YR4/3) 砂質土。炭化粒、焼土粒を微量含む。
 9 暗褐色土 (10YR3/4) 粘質土。炭化粒、焼土粒を含む。
 10 におい黄褐色土 (10YR4/3) 砂質土。
 11 褐色土 (10YR3/4) 粘質土。炭化粒、焼土粒を微量含む。



1 におい黄褐色土 (10YR4/3) 砂質土。
 2 暗褐色土 (10YR3/4) 粘質土。炭化粒を少量含む。
 3 暗褐色土 (10YR3/4) 粘質土。炭化粒、焼土粒を含む。
 4 褐色土 (10YR4/4) 粘質土。炭化粒を微量、焼土粒の中多々を含む。
 5 褐色土 (10YR4/4) 砂質土。
 6 褐色土 (10YR4/4) 粘質土。炭化粒、焼土粒を微量含む。



1 におい黄褐色土 (10YR4/3) 粘質土。



第19図 土坑址実測図 (4)

(52) D52号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Mあ1、Mあ2グリッド。重複関係：P20に切られる。平面形態：長軸約1.25m、短軸約1.1mの楕円形を呈し、主軸方位はN-24°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約15cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/4)の粘質土の単層であった。遺物出土状況：覆土中より4片の縄文土器が出土した。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(53) D53号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Hこ2、Mあ2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.3m、短軸約1.0mの楕円形を呈し、主軸方位はN-89°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約25cmを測る。覆土：にぶい褐色(10YR4/3)の粘質土の単層であった。遺物出土状況：覆土中より8片の縄文土器、礫石器が出土した。

遺物 (第24図、第4表)

7は磨石もしくは敲石で、顕著な磨滅痕と敲打痕を残す。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(54) D54号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Mあ2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.8m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、主軸方位はN-39°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/4)の粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(55) D55号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Hこ1、Mあ1グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.6m、短軸約0.5mの楕円形を呈し、主軸方位はN-17°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：褐色(10YR4/4)の砂質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(56) D56号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Hこ1グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.25m、短軸約1.05mの楕円形を呈し、主軸方位はN-88°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/3)の粘質土の単層であった。遺物出土状況：覆土中より数十点の縄文土器が出土した。

遺物 (第26図、第5表)

11は黒曜石製の石鏃である。一部欠損している。時期：出土遺物や覆土の色調から縄文時代の所産と考え

られる。

(57) D57号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Hこ2、Mあ2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.6m、短軸約0.3mの楕円形を呈し、主軸方位はN-49°-Eを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約10cmを測る。覆土：暗褐色(10YR3/4)の粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(58) D58号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Hこ2、Hこ3グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約2.4m、短軸約1.2mの連結土坑状を呈し、主軸方位はN-9°-Wを指す。断面形態：箱形を呈し、一部オーバーハングしている。検出面からの深さは約50cmを測る。覆土：黄褐色、暗褐色を基調とする土層によって被覆されていた。遺物出土状況：覆土中より12片の縄文土器片、礫石器が出土した。

遺物 (第24図、第4表)

8は礫石器であるが器種は判然としない。時期：出土遺物や覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(59) D59号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Hく2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.5m、短軸約0.35mの楕円形を呈し、主軸方位はN-36°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約10cmを測る。覆土：にぶい黄褐色(10YR4/3)の粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(60) D60号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Hく3グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.7m、短軸約0.35mの不正な楕円形を呈し、主軸方位はN-62°-Wを指す。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：にぶい黄褐色(10YR4/3)の粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(61) D61号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Hく2、Hく3グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約3.4m、短軸約1.8mの連結土坑状を呈し、主軸方位はN-8°-Eを指す。断面形態：東側に大きく影らむ袋状を呈し、検出面からの深さは約80cmを測る。覆土：褐色を基調とする土層によって被覆されていた。遺物出土状況：覆土中より11片の縄文土器、礫石器が出土した。

遺物 (第24・26図、第4・5表)

24-9は磨石もしくは敲石で、顕著な磨滅痕と敲打痕を残す。26-25は黒曜石製の石鏃である。27は黒曜石の石核である。時期：出土遺物や覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(62) D62号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Hく3グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.9m、短軸約0.8mの不正な楕円形を呈し、底面に小ピットが数箇所穿たれている。主軸方位はN-54°-Wを指す。断面形態：皿状を呈し、底面に小ピットが数箇所穿たれている。覆土：にぶい黄褐色(10YR4/3)の砂質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

(63) D63号土坑

遺構 (第19図)

検出位置：Hく2グリッド。重複関係：なし。平面形態：径約0.8mの円形を呈し、主軸方位はN-7°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：にぶい黄褐色(10YR3/4)の粘質土の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

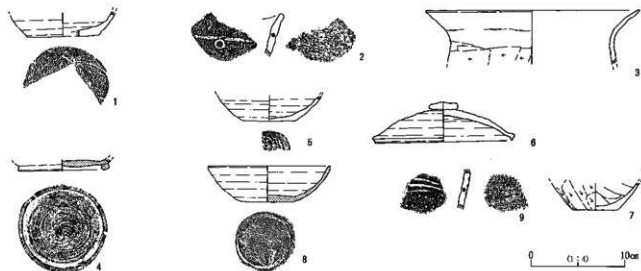
(64) D64号土坑

遺構 (第19図)

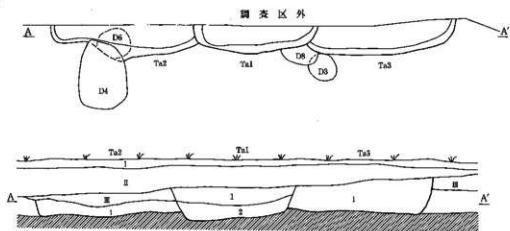
検出位置：Hか1グリッド。重複関係：H1号住居址に切られる。平面形態：長軸約0.8m、短軸約0.6mの楕円形を呈し、主軸方位はN-18°-Wを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約15cmを測る。覆土：にぶい黄褐色(10YR3/4)の粘質土の単層であった。遺物出土状況：礫石器が4点出土した。

遺物 (第24・25図、第4表)

24-10・11は礫石器で、若干くぼんでいる。25-1・2は礫石器で、顕著な磨滅痕と敲打痕を残す。時期：覆土の色調から縄文時代の所産と考えられる。

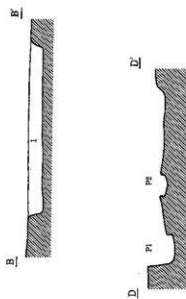
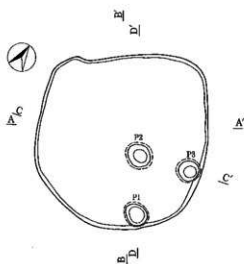


第20図 土坑址出土石器実測図

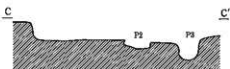


- | | |
|--|--|
| <p>T2a
1 黑褐色土層 (10YR3/2) 粘質土
角礫 (φ 1~5cm) 含石。
2 暗褐色土層 (10YR2/2) 砂質土
有礫質。礫 (φ 1~2cm) 少量含石。</p> | <p>T2b
1 黑褐色土層 (10YR2/2) 粘質土
礫 (φ 5~10cm) 含石。
T2c
1 暗褐色土層 (10YR2/2) 粘質土
礫 (φ 5~10cm) 含石。</p> |
|--|--|

標高448.00m
(1:80) 2 m

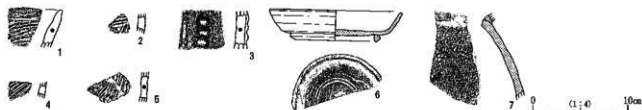


- T2d**
1 暗褐色土層 (10YR2/2) 砂礫層



標高448.40m
(1:80) 2 m

第21圖 壁穴状遺構実測圖



第22図 遺構外出土土器実測図

第3節 その他の遺構

(1) Ta1号竪穴状遺構

遺構 (第21図)

検出位置：Aき3、Aき4グリッド。重複関係：Ta2・Ta3・D8を切る。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：逆台形を呈し、掘り込み面からの深さは約70cmを測る。床面状態：緩やかな皿状を呈しているが、所々で地山の礫が突き出している。覆土：黒褐色を基調とする2層に分層出来た。西側の立ち上がりは遺物包含層から掘り込んでいるものと思われるが、同色のため判然としなかった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(2) Ta2号竪穴状遺構

遺構 (第21図)

検出位置：Aく3、Aく4、Aき3、Aき4グリッド。重複関係：Ta1に切られ、D4を切る。D6との切りあい関係は確認できなかった。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：逆台形を呈し、掘り込み面からの深さは約50cmを測る。床面状態：概ね平坦であるが、東側(山側)に向かうにつれ10cm程度高くなっている。覆土：黒褐色(10YR2/3)の、砂礫を含む粘質層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(3) Ta3号竪穴状遺構

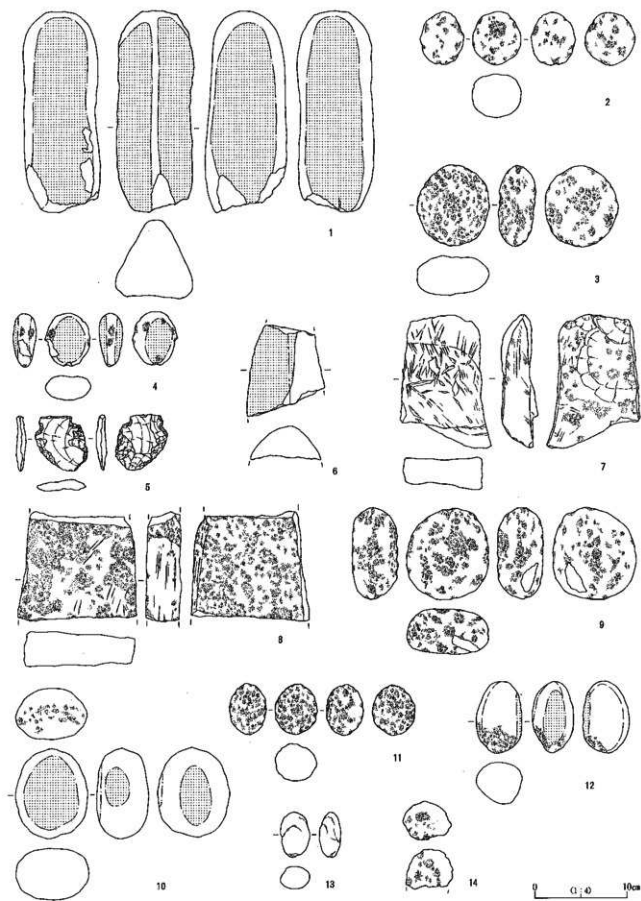
遺構 (第21図)

検出位置：Aか3、Aき3グリッド。重複関係：Ta1に切られ、D5・D7を切る。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約70cmを測る。床面状態：概ね平坦であるが、所々で地山の礫が突き出している。覆土：暗褐色(10YR3/3)の、砂礫を含む粘質層の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

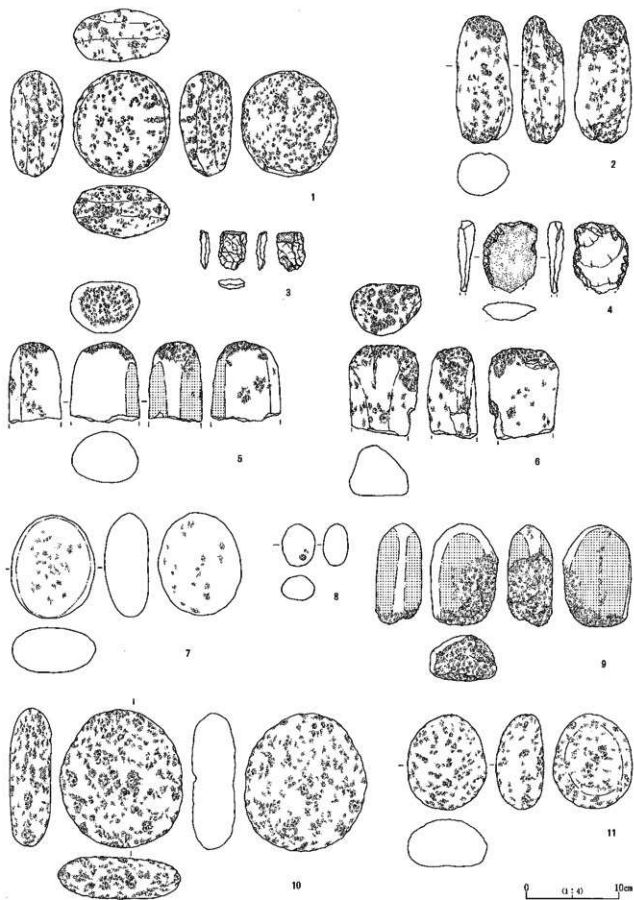
(4) Ta4号竪穴状遺構

遺構 (第21図)

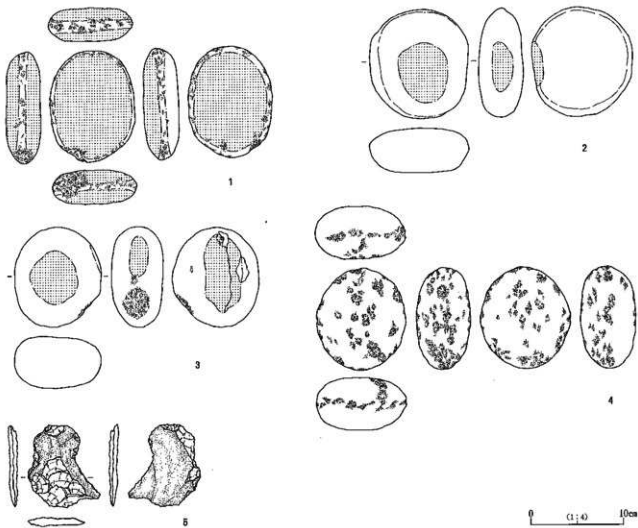
検出位置：Mい1、Mい2、Mう1、Mう2グリッド。重複関係：P1～P3に切られる。平面形態：約3.6m×約3.6mの隅丸方形を呈し、主軸方位はN-39°-Wを指す。断面形態：僅かな逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。床面状態：概ね平坦であるが、所々で地山の礫が突き出している。覆土：暗褐色(10YR3/3)の、砂礫層の単層であった。遺物出土状況：時期の判別できるような遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。



第23图 住居址出土石器实测图



第24图 土坑址出土石器实测图(1)



第25図 土坑及び遺構外出土石器実測図〈2〉

第4節 遺構外出土の遺物

本調査において出土した遺構外のグリッド遺物や竪穴住居址などから出土した混入遺物には土器類や石器類が存在した。第22図に土器類を、第25・26図に石器類を掲載した。

(1) 遺構外出土の土器類 (第22図、第3表)

1～5は縄文土器の深鉢である。いずれも小片であるので詳細は不明である。6は高台をもつ須恵器の坏である。7は須恵器の甕である。

(2) 遺構外出土の石器類 (第25・26図、第4・5表)

25-3は礫石器で、顕著な磨滅痕と敲打痕を残す。25-4は礫石器で、表裏面中央に敲打痕を若干残す。25-5は搔器で、粗い周辺剥離を施すことで刃部を作出している。26-1・2・4・5・8・9・12・13・15～18は黒曜石製の石鏃である。このうち15～18は未製品である。26-20～22は黒曜石製の石錐である。このうち22は未製品である。26は黒曜石の原石である。27は黒曜石の石核である。



第26図 黒曜石及びチャート実測図

第1表 掲載土器観察表

〈 〉 推定値 () 残存値を示す。

遺構名	現場No	整理No	掲載No	種別	器種	残存度	法基(cm)			測 量 文 様		色 調	備 考	
							口径	高さ	底径	外 面	内 面			
H1		39	9-1	灰土器	円筒1/4	(12.2)	(3.1)	—	ロココナツダ フタ(厚)付直ヘラケツリ	ロココナツダ	内)3.5/5.1/底 脚)2.5/5.2/底			
H1		26	9-2	灰土器	杯	(13.8)	3.5	(7.2)	ロココナツダ、口縁 内面)底縁糸状の跡し どが厚	ロココナツダ、口縁	内)厚)3.7/1/底 脚)1.9/2.7/1/底			
H1		27	9-3	灰土器	杯	(12.8)	4.0	6.2	ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	ロココナツダ	内)3.7/2.7/1/底 脚)1.9/2.7/1/底			
H1		25	9-4	灰土器	杯	11-底脚 2/3	13.3	3.9	5.8	ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	ロココナツダ	内)厚)2.5/5.1/底 脚)1.9/2.7/1/底		
H1P17	D64 No3	49	9-5	灰土器	杯	底脚	12.0	4.1	5.8	ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	ロココナツダ	内)厚)2.5/5.1/底 脚)1.9/2.7/1/底		
H1		8	9-6	灰土器	杯	底脚	5.2	—	(3.3)	ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	ロココナツダ	内)厚)2.5/5.1/底 脚)1.9/2.7/1/底		
H1		11	9-7	灰土器	杯	底脚	—	(2.1)	—	ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	ロココナツダ	内)厚)2.5/5.1/底 脚)1.9/2.7/1/底		
H1		28	9-8	灰土器	杯	口一底脚	—	(1.0)	(5.8)	ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	ロココナツダ	内)厚)2.5/5.1/底 脚)1.9/2.7/1/底		
H1P17	D64 No4	45	9-9	灰土器	杯	底脚	—	(1.1)	6.8	ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	ロココナツダ	内)厚)2.5/5.1/底 脚)1.9/2.7/1/底		
H1P17	D64 No4	48	9-10	灰土器	杯	底脚	—	(1.6)	6.0	ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	ロココナツダ	内)厚)2.5/5.1/底 脚)1.9/2.7/1/底		
H1		38	9-11	灰土器	灰土器	11-脚 1/5	(12.4)	(7.8)	—	ロココナツダ、自然焼 付着	ロココナツダ、自然焼 付着	内)4.0.3/5.1/1/底 脚)2.5/5.2/2/底		
H1		4	9-12	灰土器	蓋	11-脚 1/5	—	(1.3)	—	ロココナツダ	横紋ハケメ	内)1/5/5/底 脚)1.2/5.2/1/底		自然焼付着 あり。
H1P17	D64 No9	30	9-13	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	ロココナツダ	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/口フープ1/底 脚)1/5/5/底		
H1		14	10-14	灰土器	壺	口一 脚1/底 1/脚部 1/5残	(27.4)	(10.6)	—	11-脚部)ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し、平 行線あり	11-脚部)ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	内)5.0/5.1/口フープ1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1		5	10-15	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1P17	D64 No10	38	10-16	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1		20-4	10-17	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1		21	10-18	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1		1	10-19	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1		9	10-20	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1		22	10-21	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1		18	10-22	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1		20	10-23	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1		24	10-24	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1		5	10-25	灰土器	壺	口一脚上 1/5	—	(11.3)	—	ロココナツダ 胴部)自然焼付着あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/口フープ1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1P17	D64 No12	47	10-26	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1		37	10-27	灰土器	壺	胴部片	—	—	—	平行線あり	横紋ハケメ	内)5.0/5.1/底 脚)17.5/8.4/1/底		
H1P17	D64 No12	46	10-28	灰土器	杯	口一底脚 1/3	—	(2.2)	(5.8)	ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	ロココナツダ	内)厚)2.5/5.1/底 脚)1.9/2.7/1/底		
H1		31	10-29	土器類	杯	口一底脚 1/3	(12.4)	4.2	(5.8)	ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	灰色焼	内)厚)2.5/5.1/底 脚)1.9/2.7/1/底		
H1		12	10-30	土器類	杯	口一底脚 1/2残	(12.6)	4.1	5.8	ロココナツダ 底)底縁糸状の跡し	灰色焼	内)厚)2.5/5.1/底 脚)1.9/2.7/1/底		
H1P17	D64 No12	55	10-31	土器類	杯	口一底脚 1/3残	(12.0)	4.9	5.8	ロココナツダ	ヘラケツリ、黄色焼 されの割片	内)2.5/5.0/底 脚)1.9/2.7/1/底		

第2表 掲載土器観察表 () 推定値 () 残存値を示す。

遺構名	現場No	整理No	掲載No	種別	器種	残存度	法量(cm)			調査・文書		色調	備考	
							口径	胴高	底径	外面	内面			
H1	43	10-33	土師鉢	片	底部1/4	(13.0)	3.8	(6.6)	ロ～ロコナデ (底面)底面全切取	褐色地埋残存不明 内径2.5/外径2.5/底面1.0/高さ1.1				
H1	30	10-33	土師鉢	片	口～底面1/6	(13.2)	4.4	(6.2)	ロコナデ (底面)底面全切取	外径2.5/内径2.5/高さ1.7/底面1.1				
H1	33	10-34	土師鉢	片	口～底面1/6	(13.1)	4.7	(6.6)	ロコナデ (底面)底面全切取	褐色地埋 外径2.5/内径2.5/高さ1.0/底面1.1				
H1	32	10-35	土師鉢	片	口～底面1/6	(13.4)	3.6	(5.4)	ロコナデ (底面)底面全切取	褐色地埋 内径1.0/外径1.7/高さ1.5/底面1.1/底面1.0				
H1	21	21	10-36	土師鉢	片	底面	—	(1.0)	8.4	ナデ (底面)底面全切取	1等な色地埋 外径2.5/内径2.5/高さ1.0/底面1.1			
H1	35	10-37	土師鉢	片	底面	—	3.4	—	—	磨滅著しく不明 (底面)底面全切取	褐色地埋 外径2.5/内径2.5/高さ1.0/底面1.1			
H1	44	10-38	土師鉢	片	底面1/2	—	3.8	(6.5)	ロコナデ (底面)底面全切取	褐色地埋 内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1				
H1	24	10-39	土師鉢	片	底面	—	1.1	(5.1)	—	磨滅著しく不明 (底面)底面全切取	褐色地埋 内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1			
H1	3	3	10-40	土師鉢	片	口～底面1/2	(19.2)	8.3	(8.4)	ロコナデ 口縁部ナデ 口～底面1/2	褐色地埋 内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1			
H1	7	7	10-41	土師鉢	長胴鉢	11/底1/6	(26.0)	(8.3)	—	口縁部ナデ 口～底面1/6 口縁部ナデ 口～底面1/6	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1	武蔵窯		
H1	38	10-42	土師鉢	長胴鉢	口縁部1/6	(21.2)	(7.2)	—	コナデ	口～底面コナデ 底面ナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1			
H1	17	17	11-43	土師鉢	長胴鉢	口～底面1/6	(18.5)	(4.8)	—	ロ～底面コナデ 口～底面コナデ 口～底面コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1			
H1	49	11-44	土師鉢	長胴鉢	口縁部1/6	—	(4.7)	—	ロ～底面コナデ 口～底面コナデ	外径2.5/内径2.5/高さ1.7/底面1.1				
H1	11	11-45	土師鉢	長胴鉢	口縁部1/6	—	(4.0)	—	コナデ	コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1			
H2	No.3	3	13-1	灰土器	片	口～底面	(14.2)	2.6	9.8	ロコナデ 口～底面コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1			
H2	41	13-2	灰土器	片	口～底面	(13.0)	4.6	(10.6)	ロコナデ	ロコナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1			
H2	39	13-3	灰土器	片	口～底面	(15.4)	(4.0)	(11.2)	ロコナデ 口～底面コナデ	ロコナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1			
H2	No.7	7	13-4	灰土器	片	口～底面	13.0	4.1	6.2	ロコナデ 口～底面コナデ	ロコナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	No.8	8	13-5	灰土器	片	底面	—	(1.0)	(7.2)	ロコナデ 口～底面コナデ	ロコナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	No.6	6	13-6	灰土器	片	底面	—	(3.1)	(8.2)	ロコナデ	ロコナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	No.6	6	13-7	灰土器	片	底面	—	(1.4)	7.2	ロコナデ	ロコナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	No.8	8	13-8	灰土器	片	底面	—	(1.0)	9.0	コナデ	コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	23	23	13-9	土師鉢	長胴鉢	11～底面	—	—	—	コナデ	コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	60	13-10	土師鉢	片	口～底面	(21.0)	(3.8)	—	コナデ	コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1			
H2	48	13-11	土師鉢	片	口～底面	(13.0)	(4.3)	—	コナデ	コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1			
H2	No.11	11	13-11	土師鉢	片	底面	2.6	2.6	10.9	コナデ	コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	61	13-2	赤土器	片	底面	—	(1.0)	—	—	口～底面コナデ 口～底面コナデ	口～底面コナデ 口～底面コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1	ソケムス状合蓮	
H2	66	13-3	赤土器	片	口～底面	(18.0)	(5.2)	—	—	口～底面コナデ 口～底面コナデ	口～底面コナデ 口～底面コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	47	13-4	赤土器	片	口～底面	—	(6.7)	(5.1)	—	コナデ	コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	No.1	1	13-5	赤土器	片	口～底面	10.0	4.6	3.8	口～底面コナデ 口～底面コナデ	口～底面コナデ 口～底面コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	43	13-6	赤土器	片	底面	—	(3.4)	(6.2)	—	コナデ	コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	42	13-7	赤土器	片	底面	—	(3.7)	(8.8)	—	コナデ	コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	44	13-8	赤土器	片	底面	—	(3.2)	(11.2)	—	口～底面コナデ	口～底面コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	45	13-9	赤土器	片	底面	—	(3.0)	(9.6)	—	口～底面コナデ	口～底面コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	37	13-10	赤土器	片	口～底面	—	—	—	—	口～底面コナデ 口～底面コナデ	口～底面コナデ 口～底面コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	33	13-11	赤土器	片	底面	—	—	—	—	口～底面コナデ	口～底面コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	38	13-12	赤土器	片	底面	—	—	—	—	口～底面コナデ	口～底面コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		
H2	39	13-13	赤土器	片	口～底面	—	—	—	—	口～底面コナデ	口～底面コナデ	内径2.5/外径2.5/高さ1.7/底面1.1		

第8表 掲載土器観察表

〈 〉推定値 () 残存値を示す。

遺構名	現場No	整理No	掲載No	種別	器種	残存度	法量(cm)			調査・文様	色調	備考	
							口径	器高	底径				
H9		55	15-14	弥生	甕	口縁部	—	—	—	6ホー一线的縁部を破片文	ヘナナデ	内外面SV9A/136灰	
H9		52	15-15	弥生	甕	口～縁部	—	—	—	2ホー一线的縁部を破片文(上～中)	ヘナナデ	内外面1205/60赤	
H9		54	15-16	弥生	甕	口～縁部	—	—	—	6ホー一线的縁部を破片文(上～中、上～下)	ヘナナデ	内1.5V9B/4Cに5ホー線外1.5V9B/4C	
H9		59	15-17	弥生	甕	胴部	—	—	—	6ホー一线的縁部を破片文	ヘナナデ	内面1.5V9B/4Cに5ホー線外1.5V9B/2灰赤	
H9		56	15-18	弥生	甕	口縁部	—	—	—	縁部を破片文	ヘナナデ	内外面1.5V9B/4Cに5ホー線	
D1		1	20-1	弥生前期	外 甕	口縁部	—	(2.7)	(7.6)	ロクロコナデ 底面10筋を切内縁1筋	ロクロコナデ	内1.0V7/8C 外面1.0V7/1灰	
E9		1	20-2	縄文	甕	口縁部	—	—	—	半周竹管による縦管穿孔式破文(1筋の破片文)		内1.0V7/8C 外1.0V7/11灰赤	縁部(赤線部)縁部(赤線部)縁部
D26		1	20-3	土師器	長胴鉢	口～縁部 1～筋	(22.8)	(5.7)	—	11～筋部(70ナデ) 縁部(褐色(ヘラケス))	ナデ	内1.2.5V6/13に5ホー線外1.0V9B/6赤	
D27	No1	1	20-4	土師器	高直付 鉢	底面	—	(1.1)	5.6	ロクロコナデ 底面10筋を切内縁1筋	ロクロコナデ	内外面1.2.5V6/13に5ホー線	
D27		3	20-5	土師器	弁 底面1/4	—	(2.7)	(5.6)	—	ロクロコナデ 底面10筋を切内縁1筋	ロクロコナデ	内外面1.0V7/1灰白	
D28		1	20-6	土師器	坪蓋	1/2	(14.6)	4.1	ナデ 3.6	ロクロコナデ	ロクロコナデ	内面1.0V9B/2灰赤 外1.0V9B/11灰赤	左縁部ナデ
D28		2	20-7	土師器	長胴1/3	—	(2.9)	(4.6)	—	縁部(ヘラケス)	ヘナナデ	内外面1.0V9B/6赤赤褐色	
D37	No1	1	20-8	弥生前期	甕	口～高部 2/3	(12.9)	3.8	6.6	ロクロコナデ 底面10筋を切内縁1筋(ヘラケス)	ロクロコナデ	内外面1.0V7/11灰白	
D47		1	20-9	縄文	俵形	胴部	—	—	—	半周竹管による縁部穿孔式破文		内外1.0V9B/11に5ホー線 外1.0V9B/23褐色 外1.0V9B/23褐色	縁部(赤線部)縁部(赤線部)縁部
一筋		55	22-1	縄文	俵形	口縁部	—	—	—	半周竹管による縁部穿孔式破文	ナデ	内外1.0V9B/2灰赤褐色 外1.0V9B/11灰赤	縁部(赤線部)縁部(赤線部)縁部
一筋		62	22-2	縄文	俵形	胴部	—	—	—	半周竹管による縁部穿孔式破文	ナデ	内外1.0V9B/2灰赤褐色 外1.0V9B/11灰赤	中縁(赤線部)外縁
一筋		64	22-3	縄文	俵形	胴部	—	—	—	半周竹管による縁部穿孔式破文	ナデ	内面1.2.5V6/13に5ホー線外1.0V9B/2に5ホー線	中縁(赤線部)外縁
一筋		64	22-4	縄文	俵形	胴部	—	—	—	半周竹管による縁部穿孔式破文	ナデ	内外面1.0V9B/2に5ホー線	中縁(赤線部)外縁
一筋		63	22-5	縄文	俵形	胴部	—	—	—	半周竹管による縁部穿孔式破文	ナデ	内1.0V9B/2に5ホー線外1.0V9B/4に5ホー線	縁部(赤線部)縁部(赤線部)縁部
一筋		1	22-6	弥生前期	甕	口～高部 1/3	(14.6)	3.2	(6.6)	ロクロコナデ 底面10筋を切内縁1筋	ロクロコナデ	内1.0V9B/6 外1.0V9B/6 外2.5V6/3に5ホー線	
グランド		1	22-7	弥生前期	甕	胴部	—	—	—	半周竹管による縁部穿孔式破文	ナデ	内1.2.5V6/11灰赤 外1.2.5V6/11灰赤 外1.0V9B/2に5ホー線	

第4表 掲載石器観察表

〈 〉 推定値 () 残存値を示す。

掲載No	遺構名	整理No	種別	器種分類	石質	残存度	法長(cm)			質量(g)	注 記	備 考
							長さ	幅	厚さ			
23-1	H1	1	磨石器	磨石	安山岩	部欠	21.7	8.3	8.5	3200	NKIV.AE.H1付カマド	断面三角形の棒状を呈し、一面は磨面に磨滅する。加熱痕は認められない。磨面の付着物あり。
23-2	H1	2	磨石器	不明	多孔質安山岩	完存	5.7	5.3	4.7	960	NKIV.AJK.H1付V14 中刀盛土	磨面は使用直後形成されていない。
23-3	H1	6	磨石器	磨石	安山岩	完存	8.7	7.7	4.4	381	NKIV.AE.H1付No13	扁平な磨面側の磨滅および表面面に磨滅を致す。
23-4	H1	3	磨石器	不明	輝石	完存	5.8	4.9	2.7	27	NKIV.AE.H1付P16	扁平な磨面を呈し、表裏面に磨滅痕が認められる。残欠部が認められる。
23-5	H1	5	割片 石器	割片 砥石	輝石質	完存	6.1	6.7	1.2	30	NKIV.AJK.H1付 槌?	主要部面に強い刃道磨滅を施す。
23-6	H2	11	磨石器	磨石	安山岩	一部存	(9.6)	(6.4)	(3.6)	292	NKIV.AE.H2付No21	残存部に強い磨面磨滅痕を施す。
23-7	H2	7	磨石器	砥石	砂岩	1/4残存	14.5	10.0	3.5	600	NKIV.AJK.H2付一槌	扁平な磨面を呈し、表裏面に磨滅痕を施す。表面に強い磨面痕が認められる。縁部に強い角磨の磨滅痕を施す。
23-8	H2	10	磨石器	砥石	砂岩	1/4残存	(11.4)	12.0	3.8	882	NKIV.AJK.H2付No2	断面扁平な表面および側面に磨滅痕を施す。縁部から磨滅痕を施す。表裏面および右側面に強い角磨の磨滅痕を施す。
23-9	H2	13	磨石器	砥石	安山岩	完存	5.9	8.9	1.8	500	NKIV.AJK.H2付1区 黄色(下層)一槌	扁平な磨面側の表裏面に磨滅痕を施す。
23-10	H2	15	磨石器	磨石 砥石	安山岩	完存	9.7	7.8	5.5	620	NKIV.AE.H2付No4	扁平な磨面側の表裏面に下丁の磨滅痕を施す。上縁部に強い磨面痕を施す。
23-11	H2	8	磨石器	不明	安山岩	完存	5.5	4.0	3.9	104	NKIV.AE.H2付V区1 槌	石器整理No2と類似する。
23-12	H2	14	磨石器	磨石 砥石	安山岩	完存	7.8	4.8	4.1	208	NKIV.AE.H2付1区 黄色(下層)一槌	3面磨面、磨面磨滅痕を施す。
23-13	H2	12	磨石器	磨石 砥石	チャート	完存	4.8	3.2	2.4	34	NKIV.AJK.H2付東側 支遺構出土 槌	磨面の表面が滑らかに磨滅するが、人工的な磨滅は不明。
23-14	H2	9	磨石器	砥石	安山岩	一部存	5.1	(4.3)	(4.2)	111	NKIV.AE.H2付遺文庫	正面に磨面に強い磨面痕が認められる。
24-1	D32	16	磨石器	磨石 砥石	安山岩	完存	11.3	10.3	5.6	900	NKIV.AE.D32付No1	扁平な磨面側の表裏面に磨滅痕を施す。
24-2	D32	17	磨石器	磨石	安山岩	完存	13.8	6.0	4.6	520	NKIV.AE.D32付No2	断面磨面三角形の棒状を呈し、上下磨面に磨滅痕を施す。
24-3	D47	21	割片 石器	割片 砥石 or 砥石	頁岩	部存	4.8	2.1	1.1	12	NKIV.AE.D47一槌	両辺磨面が確認できるため製品として考えられるが、存在感が低く磨滅痕は不明。
24-4	D47	20	割片 石器	砥石	頁岩	先端部 欠損	(7.7)	5.7	1.9	78	NKIV.AE.D47一槌	表面は自然磨を施し、裏面は上層磨面を施す。強い刃道磨滅痕を施すことで刃部を作出する。
24-5	D37	18	磨石器	磨石 砥石	安山岩	一部存	(8.6)	5.7	5.5	572	NKIV.AE.D37付遺No 2	断面磨面三角形の棒状を呈し、表面に側面の一部に磨滅痕を施す。縁部部に磨滅痕を施す。
24-6	D47	19	磨石器	磨石 砥石	閃緑岩	一部存	(9.2)	7.5	5.5	600	NKIV.AE.D47一槌	断面磨面三角形の棒状を呈し、三面に磨滅痕を施す。表面には黄色部(付着層)が認められる。残存する磨面に磨滅痕を施す。
24-7	D53	22	磨石器	磨石	安山岩	完存	10.9	8.9	4.7	674	NKIV.AE.D53付No1	扁平な磨面側の表裏面に若干の磨滅痕と磨面痕を施す。
24-8	D58	25	磨石器	不明	安山岩	完存	4.5	3.5	2.6	49	NKIV.AE.D58 槌	表面に若干の磨面痕を施す。
24-9	D61	24	磨石器	磨石 砥石	安山岩	完存	8.8	7.3	5.0	566	NKIV.AJK.D61 槌	断面三角形の棒状を呈し、磨面と側面に磨滅痕を施す。磨面と側面に磨滅痕を施す。
24-10	D64	28	磨石器	磨石	安山岩	完存	14.8	13.2	4.3	1185	NKIV.AE.D64_No24	扁平な磨面側の表裏面に磨面痕を施す。
24-11	D64	25	磨石器	磨石 砥石	安山岩	完存	0.2	8.5	3.2	576	NKIV.AE.D64_No5	扁平な磨面側の表裏面に磨滅痕と磨面痕を施す。
25-1	D64	27	磨石器	磨石 砥石	安山岩	完存	11.9	9.0	3.6	582	NKIV.AE.D64_No13	扁平な磨面側の表裏面に磨滅痕を施す。磨面と側面に磨滅痕を施す。
25-2	D64	28	磨石器	磨石	安山岩	完存	11.6	10.6	4.8	922	NKIV.AE.D64_No6	扁平な磨面側の表裏面に磨滅痕を施す。
25-4	調査区一槌	1	砥石器	砥石	輝石質	完存	10.9	9.6	8.8	800	NKIV.D92	表裏面中央に磨面痕を若干施す。
25-3	調査区一槌	2	磨石器	磨石 砥石	安山岩	完存	10.7	9.3	5.9	820	NKIV.D92	表裏面中央に磨滅痕を施す。側面一部所に磨滅痕を施す。磨面痕を施す。
25-5	調査区一槌	20	割片 石器	磨石	安山岩	完存	8.8	7.8	5.0	60	NKIV.AE2	表裏面に磨滅痕を施す。強い刃道磨滅痕を施すことで刃部を作出する。

第5表 掲載石器観察表

〈 〉 推定値 () 残存値を示す。

掲載No	遺構名	発掘No	分類	器種	材質	残存状態	径長(cm)			質量(g)	産出(出土位置)	備考
							長さ	幅	厚さ			
26-1	H2	221	割片石器	石核	黒曜石	製品完存	(1.33)	0.75	0.38	0.5	NK.IV, A6K遺着区 近	SKKD考据文書教習資料
26-2	H2	228	割片石器	石核	黒曜石	製品完存	1.58	1.65	0.60	1.0	NK.IV, A6K, H2No2	SKKD考据文書教習資料
26-3	D47	127	割片石器	石核	黒曜石	製品破損欠	1.45	1.20	0.70	0.4	NK.IV, A6K, H1住1区1層	
26-4	H1	2	割片石器	石核	黒曜石	製品完存	1.65	1.35	0.55	1	NK.IV, A6GH1住1区1層	SKKD考据文書教習資料
26-5	H1	1	割片石器	石核	黒曜石	製品完存	2.18	1.35	0.53	1.2	NK.IV, A6GH1住1区1層	SKKD考据文書教習資料
26-6	D47	417	割片石器	石核	黒曜石	製品完存	2.03	1.50	0.39	0.6	NK.IV, A6D47	
26-7	D14	409	砕片	—	黒曜石	製品完存	1.73	1.05	0.38	0.1未測	NK.IV, A6D14	
26-8	H1	9	割片石器	石核	黒曜石	製品完存	1.85	1.05	0.38	0.4	NK.IV, A6GH1住1区1層	
26-9	H1	828	割片石器	石核	黒曜石	変形	1.50	1.35	0.30	0.5	NK.IV, A6K, D47-1系	
26-10	D22	428	割片石器	石核	黒曜石	製品欠損	1.50	(1.33)	0.57	0.5	NK.IV, A6K22	
26-11	D65	572	割片石器	石核	黒曜石	製品欠損	2.03	(1.68)	0.45	0.8	NK.IV, A6D65	
26-12	H2	218	割片石器	石核	黒曜石	製品欠損	2.03	(1.47)	0.38	0.6	NK.IV, A6K, Ta6除出位置	
26-13	H2	236	割片石器	石核	黒曜石	製品欠損	1.65	(1.30)	0.60	1.3	NK.IV, A6K, H2内側壁文書出	
26-14	D65	571	割片石器	石核	黒曜石	製品欠損	1.80	1.95	0.68	1.3	NK.IV, A6D65	
26-15	H1	125	割片石器	石核	黒曜石	未製品	2.03	1.20	0.45	1.0	NK.IV, A6K, H1住1区1層	
26-16	H2	492	割片石器	石核	黒曜石	未製品	2.25	2.10	0.83	3.1	NK.IV, A6K, 10階1区	
26-17	H1	53	割片石器	石核	黒曜石	未製品	3.08	2.48	1.13	5.7	NK.IV, A6GH1住1区1層	
26-18	H1	61	割片石器	石核	黒曜石	未製品	2.33	1.51	0.83	2.8	NK.IV, A6GH1住1区1層	
26-19	H2	287	割片石器	—	黒曜石	割片素材	3.15	2.11	1.05	7.9	NK.IV, A6K, H2内側壁文書出	
26-20	H1	166	割片石器	石核	黒曜石	製品完存	4.65	1.73	0.75	5.1	NK.IV, A6KH2住No2	
26-21	H2	208	割片石器	石核	黒曜石	製品欠損	(1.58)	0.68	0.65	0.8	NK.IV, A6K, 10階壁面文書出	
26-22	H1	19	割片石器	石核	黒曜石	未製品	(2.70)	1.50	0.38	1.3	NK.IV, A6GH1住1区1層	
26-23	H1	55	割片石器	石核	黒曜石	割片素材	3.90	1.73	1.35	9.0	NK.IV, A6GH1住1区1層	赤銅
26-24	H1	140	割片石器	—	黒曜石	割片素材	3.63	2.10	1.52	9.5	NK.IV, A6KH2住1区1層	
26-25	D61	605	割片石器	—	黒曜石	—	2.55	1.35	1.20	2.6	NK.IV, A6K7a5	
26-26	H2	191	砥石	—	黒曜石	—	4.85	2.10	1.65	14	NK.IV, A6KH2住1内側壁文書出	SKKD考据文書教習資料, 2号石核
26-27	D61	608	砥石	—	黒曜石	—	2.10	3.08	1.85	16	NK.IV, A6K7a5	SKKD考据文書教習資料

第V章 総括

本遺跡の発掘調査によって検出された遺構は縄文時代前期から弥生時代後期を経て奈良・平安時代にいたる住居址3棟及び土坑64基などであった。調査区によっては近代以降の造成によって遺構面が削平されていることを考慮すると相当数の遺構が存在していたものと考えられる。

開飲遺跡はこれまでの分布調査、本調査及び試掘調査によって弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡と考えられていた。ことに奈良～平安時代にかけては検出住居址数も多く、この遺跡の主體的な時期を示すものとして理解されていた。また、近接する開飲製鉄遺跡の存在や、本調査地点の南側を流れる御堂川を挟んだ対岸に所在する豊饒堂遺跡での鍛冶遺構の検出事例から、鉄の生産及び加工を生業とする集団の存在が指摘されてきた遺跡でもある。

今回の発掘調査では製鉄及び鍛冶にかかわる遺構・遺物は確認されなかったが、これまで開飲遺跡では知られていなかったいくつかの事例を確認することができた。これらを踏まえつつ今回の調査成果を概観する。

まず、新発見としてあげることができるのが縄文時代前・中期の遺構・遺物の発見である。住居址こそ確認することはできなかったが、数多くの土坑を検出した。これらの中には、断面形態が逆台形のものやフラスコ型のもので並存していた。断面形がフラスコ型を呈しているものについては貯蔵目的に構築されたと考えられるが、断面形逆台形のものもおよそ同様の用途であったのであろう。これら土坑の覆土中からは数多くの黒曜石製鉄や木製品及びチップなどが出土した。さながら鍛製作場所の観を呈しているようにも思われる。先述の通り、本調査区内では住居址は確認されなかったのであるが、調査区外に集落跡が存在しており、当該調査区が広場の環境であったことも想像できる。

次に指摘できるのは弥生時代後期の住居跡の存在である。従来、坂城中学校付近の宮上遺跡周辺が弥生時代の集落跡として知られているが、山裾に近い本調査地点まで弥生時代に住居が作られていたことは新たな発見といえる。

今回の発掘調査で得られた新発見の中で特筆すべきは礎石立ちの柱を持つ堅穴住居址(H1号住居址)の検出であろう。本住居址の床面から、やや南側に偏った配置であったが、4基の礎石が検出された。床面を掘り下げて設置されていたが、4基の礎石の上面は概ね水平で柱を設置したものと推知できた。坂城町内で発見例は無いが、類例は長野県佐久市前田遺跡などに見出すことができる。寺院建築などの技術が堅穴式住居にも用いられたのであろうか。この辺の分析は周辺地域の類例を精査して考究してゆく必要があるであろう。

先に述べたが、本開飲遺跡と御堂川を挟んで対岸に所在する豊饒堂遺跡も開飲遺跡とほぼ同様の時期の遺跡である。今回の調査成果を踏まえて、両遺跡の時期的あるいは性格的な問題を比較検討して、御堂川水系の古代社会の環境を分析する必要がある。また、本調査地点から南に約1km離れた場所に所在する町横尾遺跡も小河川付近に展開する集落址である。河川をはじめとする自然環境と、古代集落の関係についても科学的分析を行っていく必要がある。

写 真 图 版



A区全景 (東より)



H1号住居址 (西より)



H1号住居址カマド (西より)



H2号住居址 (西より)



H2号住居址カマド (西より)



D58 (西より)



D46 (東より)



T a 4 (南西より)



B区全景 (西より)



D区全景 (南西より)



C区全景 (北より)



E区全景 (東より)



15-4

H 3 号住居址出土器 (1 : 3)



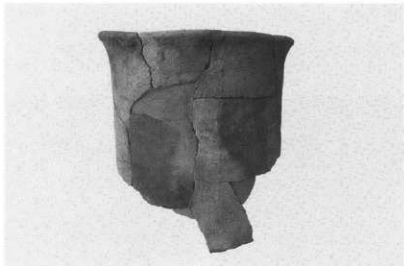
15-5



13-1



13-4



13-9

H 2 号住居址出土器 (1 : 3)



20-6

土坑出土器 (1 : 3)



20-8



25-1



25-2



25-3



25-4



25-5



25-6



25-20 (1 : 2)



25-7



25-8



25-9



25-10



25-11



25-16



22-5 (1 : 3)

石器 (1 : 1)

報告書抄録

ふりがな	かいぜいせきよん
書名	開飲遺跡Ⅳ
副書名	長野県埴科郡坂城町町営住宅及び町道建設に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第31集
編著者名	助川 朋広・時信 武史
編集機関	坂城町教育委員会
所在地	〒389-0601 長野県埴科郡坂城町大字坂城6362-1 TEL 0268-82-1109
発行年月日	2008年3月28日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
開飲遺跡Ⅳ	埴科郡坂城町大字中之条	20521		36°26'54"	138°11'52"	2006年6月5日～ 2007年3月29日	1,500㎡	町営住宅及び町道建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
開飲遺跡Ⅳ	集落址	縄文～平安	竪穴住居址 3棟 土坑址 64基 竪穴状遺構 4基 ビット 44基	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器	古代の集落址の調査

坂城町埋蔵文化財調査報告書

	『開畝製鉄遺跡—第1次調査報告書』	1977
	『開畝製鉄遺跡—第2次調査報告書』	1978
	『東裏遺跡』	1983
	『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ』（概報）	1993
	『南条遺跡群 塚山遺跡』	1993
第1集	『南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』	1994
第2集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1994
第3集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1995
第4集	『南条遺跡群 塚山遺跡Ⅱ』	1995
第5集	『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』	1996
第6集	『中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ』	1996
第7集	『中之条遺跡群 上町遺跡Ⅱ』	1996
第8集	『上五明冬里水田址』	1996
第9集	『町内遺跡発掘調査報告書1995』	1996
第10集	『坂城町試掘調査・立会い調査報告書』	1996
第11集	『町内遺跡発掘調査報告書1996』	1997
第12集	『戊久保・町横尾遺跡』	1998
第13集	『込山Bほか 発掘調査報告書 1997』	1998
第14集	『町内遺跡発掘調査報告書1998』	1999
第15集	『町内遺跡発掘調査報告書1999』	2000
第16集	『開畝遺跡Ⅲ』	2000
第17集	『中之条遺跡群 北川原遺跡Ⅱ』	2001
第18集	『町内遺跡発掘調査報告書2000』	2001
第19集	『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』	2001
第20集	『金井東遺跡群 保地遺跡Ⅱ』	2002
第21集	『町内遺跡発掘調査報告書2001』	2002
第22集	『町内遺跡発掘調査報告書2002』	2003
第23集	『豊饒堂遺跡Ⅲ』	2004
第24集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2003』	2004
第25集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2004』	2005
第26集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2005』	2006
第27集	『込山遺跡群 込山C遺跡Ⅱ・Ⅲ』	2006
第28集	『込山遺跡群 込山D遺跡』	2007
第29集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2006』	2007
第30集	『南条遺跡群 青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ』	2007
第31集	『開畝遺跡Ⅳ』（本書）	2008

坂城町埋蔵文化財調査報告書第31集

開畝遺跡Ⅳ

発行日	2008年3月28日
編集者	坂城町教育委員会 〒389-0601 長野県埴科郡坂城町大字坂城6362-1 TEL 0268 (82) 1109
印刷者	信毎書籍印刷株式会社 〒381-0037 長野県長野市西和田1丁目30番3号 TEL 026 (243) 2105

